

富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書

－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2024

富山市教育委員会

富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書

－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2024

富山市教育委員会

例 言




- 1 本書は、富山県富山市米田町二丁目に所在する米田大覚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、有限会社アドバンス不動産が事業主体となる米田町二丁目地内宅地造成工事に伴い、有限会社毛野考古学研究所富山支所に調査補助を委託して実施した。工事立会は富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書で報告する発掘調査・工事立会の概要は次のとおりである。
 - (1) 令和5年度発掘調査

調査面積	249.60 m ²
調査期間	令和5年8月17日～令和5年8月28日
整理期間	令和5年8月29日～令和6年3月29日
担当者	泉田侑希（富山市教育委員会埋蔵文化財センター 学芸員） 常深 尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）
 - (2) 令和5年度工事立会

調査面積	359.31 m ²
調査期間	令和5年7月28日～令和5年9月25日
整理期間	令和5年9月26日～令和6年3月29日
担当者	泉田侑希、鹿島昌也、堀内大介、野垣好史、三上智丈、納屋内高史、仲あずみ （富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
- 4 本書の執筆は、第1章・第2章・第4章・第5章第2節を泉田、第3章・第5章第1節を常深が行い、編集は常深が行った。文責は文末に記した。
- 5 調査にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（敬称略）。
米田町二丁目地区 蒲生侑佳
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第Ⅶ系である。挿図の方位は真北、水平基準は海拔高である。
- 2 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず01からの通し番号を付し、SA・SBは個別に1から番号を付した。
SA(柵) SB(掘立柱建物) SD(溝) SE(井戸) SK(土坑) SP(ピット) SX(不明遺構)
- 3 層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1995年後期版』に拠る。
- 4 遺物実測図の縮尺は、1/3である。
- 5 挿図中の網掛けは、次のとおりである。

遺物	 赤彩	 煤・黒色処理	 油煙
----	--	--	--
- 6 第1図は富山市基本図、第2図は国土地理院発行2万5千分1地形図をもとに作成した。

目 次

例言・凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 工事立会・発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果(発掘調査)	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺 構	6
第4節 遺 物	13
第4章 調査の概要(試掘調査・工事立会)	19
第1節 調査の方法	19
第2節 調査成果の概要	19
第5章 総 括	24
第1節 発掘調査	24
第2節 工事立会	26
引用・参考文献	26
写真図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 発掘調査・試掘調査・工事立会位置図	2	第9図 掘立柱建物出土遺物図	12
第2図 周辺の遺跡分布図	5	第10図 溝出土遺物図(1)	13
第3図 基本層序	6	第11図 溝出土遺物図(2)	14
第4図 調査区全体図	7	第12図 土坑・井戸・ピット・遺構検出面出土遺物図	15
第5図 掘立柱建物SB1・2、溝SD03・14遺構図	8	第13図 試掘調査・工事立会調査区全体図	21
第6図 掘立柱建物SB3、柵SA1・2、井戸SE44遺構図	9	第14図 試掘調査・工事立会遺構図(1)	22
第7図 溝SD01・02、土坑SK15遺構図	10	第15図 試掘調査・工事立会遺構図(2)	23
第8図 溝SD17・18・21・22・37・39・41・42・45・46・60・63・73遺構図	11	第16図 米田大覚遺跡の古代遺構	25

表 目 次

第1表 遺物観察表(1)	16	第4表 試掘調査・工事立会で確認された遺構・遺物(1)	19
第2表 遺物観察表(2)	17	第5表 試掘調査・工事立会で確認された遺構・遺物(2)	20
第3表 遺物観察表(3)	18		

写真図版目次

写真図版1 遺構(1) 発掘調査	写真図版5 遺物(1) 発掘調査
写真図版2 遺構(2) 発掘調査	写真図版6 遺物(2) 発掘調査
写真図版3 遺構(3) 発掘調査	写真図版7 遺物(3) 工事立会
写真図版4 遺構(4) 工事立会	

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経過

米田大覚遺跡は、昭和63年～平成3年度に富山市教育委員会（以下、富山市教委）が実施した分布調査の結果を受け、平成5年刊行『富山市遺跡地図（改訂版）』に「米田大覚遺跡」（No. 201021）として登載した。平成25年刊行『富山市遺跡地図』では、遺跡番号を「米田大覚遺跡」（No. 2010034）に変更した。これまでの調査により、古代の官衙・集落遺跡、中世の集落遺跡であることが判明している。今回の調査で既存の包蔵地範囲が南側へ拡大することが分かり、現在の埋蔵文化財包蔵地の面積は182,088㎡である。

令和5年6月12日、富山市米田町二丁目地内において、工事主体者から宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。工事計画地の北東隅が、埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、その土地に対し同年6月29日、7月18日に試掘調査を実施した。その結果、溝や土坑、平安時代の須恵器、土師器などが確認されたことから、試掘調査の対象地全体に遺跡が所在することが判明し、遺跡が埋蔵文化財包蔵地の範囲外まで広がる可能性が考えられた。

試掘調査の結果を受け、工事主体者側と遺跡の保護措置について協議をした結果、道路側溝工事と擁壁工事、管工事が遺跡の損壊を免れなかったため、工事計画地8,623.94㎡のうち、試掘調査対象地に建設する道路部分249.60㎡は発掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲外に計画された道路工事や擁壁工事等については、事前に試掘調査を行い、遺跡を損壊する部分は工事立会を行うこと、宅地部分は盛土による遺跡の地下保存をすることで合意した。

文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出は、令和5年7月27日に工事主体者から提出され、同年8月1日に富山県教育委員会へ副申した。文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、同年8月21日に富山県教育委員会へ提出した。

第2節 工事立会・発掘調査の経過

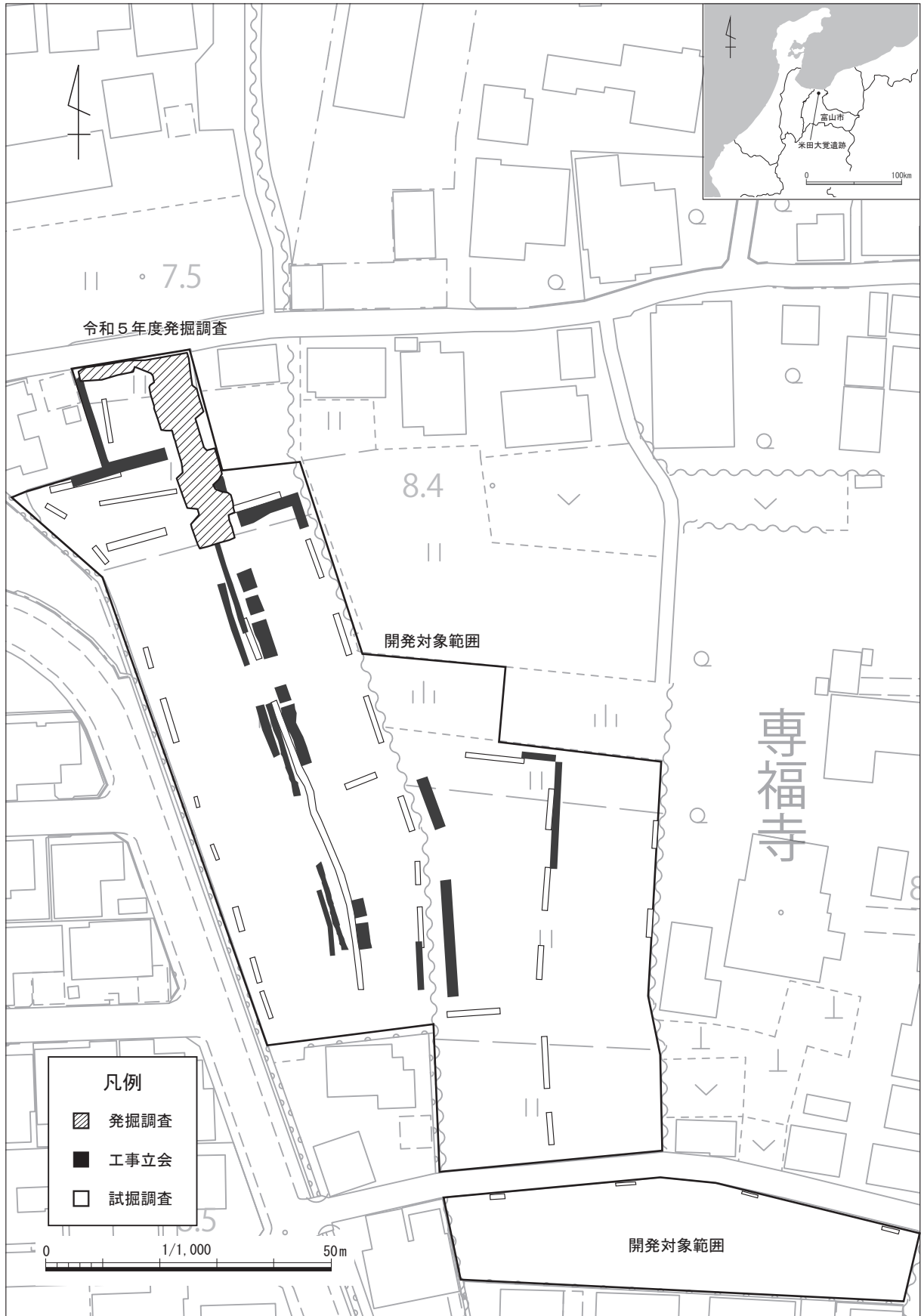
工事立会 まず工事立会が必要な範囲を把握するために、工事請負業者の協力のもと道路・擁壁工事計画地内で試掘調査を実施した。遺跡の所在が確認された範囲については、工事掘削時に富山市教委埋蔵文化財センターが工事立会を行った。期間は令和5年7月28日～9月25日である。

発掘調査 発掘調査は、有限会社アドバンス不動産から有限会社毛野考古学研究所富山支所に調査補助委託を発注し、実施した。期間は令和5年8月17日～8月28日である。

第3節 整理作業の経過

発掘調査、工事立会合わせて、遺物はコンテナ箱17箱分が出土した。整理作業は、発掘調査分を有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託し、工事立会分を富山市教委埋蔵文化財センターで行った。実施期間は令和5年8月29日から令和6年3月29日までである。令和6年3月29日に本書を刊行して完了した。

（泉田）



第1図 発掘調査・試掘調査・工事立会位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山市は平成17年(2005)の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一を占める広大な市域となった。市域の地形は西～南部の丘陵・山地と北～東部の平野に大別される。

米田大覚遺跡が所在する富山市米田町二丁目地内は、富山平野北部に位置する。富山平野は、北は富山湾、東は早月川扇状地、西は呉羽丘陵に接し、南は飛騨山地から広がる低～高位段丘からなる台地に面する。また富山平野は複合扇状地で、平野内には常願寺川や神通川が流れ、特に常願寺川水系が形成した扇状地と氾濫原の発達が顕著である。

米田大覚遺跡は、神通川右岸の下流域に立地し、北方約3kmには海岸線があり、西方約1.5kmに神通川、東方約4kmに常願寺川が流れる氾濫原に位置する。周辺は「米田町」の地名のとおり、田畑が広がる景観を呈していたが、南と北に国道(8号・415号)、東には県道八幡田-稲荷線(産業道路)がはしるなど、道路網が早くから整備され、宅地化・工業化が進む。

調査地は、西側の豊田町から米田町にかけて広がる微高地と、東側の米田町一丁目に所在する自然堤防との間に挟まれる低地である。調査前は水田として利用されていた。調査地の標高は約8mである。

第2節 歴史的環境

本遺跡を含む神通川右岸の微高地～低湿地帯に集落が形成されるのは縄文時代晩期からで、以降は連綿と遺跡が形成される。

縄文時代 縄文時代晩期後半に、本遺跡南方の微高地上で遺跡が形成される。豊田遺跡(15)では、縄文時代晩期後半の打製石斧や弥生時代中期の石庖丁形石器(穂つみ具)が出土した(富山市教委1974)。微高地上には豊丘町遺跡(14)、豊田遺跡(15)が所在し、同様に縄文時代晩期の土器が散布する。豊田大塚・中吉原遺跡(9)では、縄文時代晩期後半～終末期の御物石器や石鋸・石刀・中空土偶などが意図的に破壊された状態で沼へ廃棄される状況が検出された(富山市教委1998・2013)。ほか森遺跡(4)では、試掘調査で縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層が確認されている。

弥生時代・古墳時代 本遺跡周辺の弥生時代前期の遺跡は不明瞭である。弥生時代中期後半にかけては、微高地から氾濫原へ遺跡の分布が拡大し、玉作りを行う集落が出現する。本遺跡南東の米田南田遺跡(6)では弥生時代中期後半～後期に比定される管玉の未成品(富山市教委2019)、宮町遺跡(20)では弥生時代後期のヒスイ・碧玉・鉄石英などの石材と勾玉・管玉が出土した(富山市教委2000・2007)。

弥生時代終末期以降は、飯野新屋遺跡(17)で井戸から赤彩土器や破砕された土師器が大量に出土し(富山市教委1984・1987)、祭祀跡と考えられている。豊田大塚・中吉原遺跡(9)では赤彩弥生土器、穿孔された土器などが大量に沼へ廃棄される遺構が検出され(富山市教委1998)、古墳時代前期以降も居住域を東へ移動させつつ、引き続き沼への祭祀を行う様子が確認された(富山市教委2013)。

本遺跡南方にある下富居遺跡(16)では、試掘調査で谷地形の肩部に、弥生時代中期に比定される土器だまりが検出され、中富居遺跡(26)では弥生時代終末期の土器捨て場と考えられる遺物包含層が確認されている(富山市教委1990)。

古墳時代前期には、本遺跡の南西でちょうちょう塚(13)が築かれる。一辺21～22m・高さ4mの方墳で、赤彩土器や底部穿孔壺など祭祀色の強い土器が出土した(藤田・駒見1981)。上記の集落をまとめた首長の墓と考えられる。

古代 平安時代中期(10世紀前半)に編纂された『倭名類聚抄』のなかに、古代新川郡10郷の記載があり、本遺跡周辺は「長谷郷」に比定される(藤田2004)。また、本遺跡東方をはしる県道蓮町-新庄線は、7世紀頃に成立した「斜向道」と呼ばれる伝路・伝馬路の可能性が指摘されており(藤田2004)、この道路沿いには郡衙比定地をはじめとした古代律令国家にとって重要な遺跡が集中する。中富居遺跡(26)では、9世紀初め~中頃まで畠地として利用されたことを示す溝群と、環境変化により沼地化した土地を9世紀後半以降に水田として再開発した際に、古代新川郡「磐瀬郷」の領内に広がる条里地割の里境として、東西方向に区画溝が形成されるといった土地利用の変遷が確認された。出土遺物には灰釉陶器、赤彩埴、墨書土器「庄カ」「加□□」「京カ」がある。出土遺物からは官衙的要素を読み取れるが、土師器煮炊具の出土割合が高いことから、一般集落に位置づけられる(富山市教委1999・2023)。宮町遺跡(20)では、軸方向の揃った掘立柱建物群や道路跡が確認され、古代新川郡「志麻郷」に関連する施設と考えられている(富山市教委2006)。

米田大覚遺跡(1)では、平安時代(9世紀後半)が主体の掘立柱建物32棟、井戸9基、道路遺構などが検出され、石帯や緑釉陶器、200点以上の墨書土器が出土した。掘立柱建物は棟方向を揃えた規則的な配置をなすこと、一般集落遺跡とは異なる出土遺物の構成から、新川郡衙と考えられている(富山市教委2006)。米田南田遺跡(6)では、砂鉄から鉄を製錬した際に排出される鉄滓が出土し、新川郡衙に付属する工場の可能性がある(富山市教委2019)。本遺跡西方に位置する蓮町遺跡(2)は、『延喜式』にみえる「磐瀬駅家」とする見方がある(藤田2004)。豊田大塚・中吉原遺跡(9)では、人面墨書土器や人形などの律令祭祀遺物が多数出土し、本遺跡との位置関係から新川郡衙の祭祀場と考えられている(富山市教委1998・2013、堀沢2003)。

中世以降 鎌倉時代(13世紀後半)には豊田大塚・中吉原遺跡(9)で掘立柱建物、区画溝、貯水池状遺構及び、それと連結する灌漑水路が検出され、縄文時代以来の伝統的祭祀場から集落へと土地利用が変化する。しかし、継続はせず、江戸時代から近代に至るまで土地利用は低調だったと考えられる(富山市教委2013)。中富居遺跡(26)では、前述した古代の条里地割が中世以降も強い境界性を保ち、その区画上に、火葬され珠洲焼の蔵骨器に納められた集石墓が検出された。13世紀後半~14世紀後半に比定される(富山市教委2023)。宮町遺跡(20)は、室町時代(13~14世紀)の広い堀で方形に区画された中に、狭い堀により短冊型に小さく区画された遺構があり、小区画の中には小規模な掘立柱建物や井戸を検出した。出土遺物には鞆羽口・鉄滓・砥石などの鍛冶道具、漆布が付着した珠洲があり、鍛冶職人や漆職人などが存在した町屋的性格が強い集落と推定されている(古川1995・富山市教委2000)。

米田大覚遺跡(1)では、戦国時代(14~15世紀代)の屋敷地の区画溝とみられるL字状・コ字状に屈曲する大溝が検出され、ほぼ完形の銅製花瓶が出土したことが特筆される。ほか板碑や五輪塔の一部など宗教関連の遺物が出土する。中世荘園「米田保」との関連が推測される(富山市教委2009)。小西北遺跡(21)では、戦国時代を中心とした居館跡が確認された。居館を巡る堀の内側には土塁が築かれ、防御色が強い。館内にあった廃棄土坑からは大量の箸と漆塗の小皿「三ツ盛り 丸に三頭右巴」が出土し、この紋は神保氏の家紋と類似することから、神保氏家臣の館跡と考えられている(富山市教委2000)。

江戸時代前期には、神通川河口右岸に加賀藩営の渡し場「千原崎の渡」が設けられた。千原崎遺跡(3)では、土間建物などの集落遺構が検出され、越中瀬戸焼が数多く出土した。宿場的な町屋遺構群と考えられている(富山市教委1996)。(泉田)



- 1:米田大覚遺跡 2:蓮町遺跡 3:千原崎遺跡 4:森遺跡 5:森B遺跡 6:米田南田遺跡 7:水落遺跡 8:水落南遺跡
 9:豊田大塚・中吉原遺跡 10:豊田中吉原Ⅱ遺跡 11:犬島遺跡 12:豊田本町一丁目遺跡 13:ちょうちょう塚
 14:豊丘町遺跡 15:豊田遺跡 16:下富居遺跡 17:飯野新屋遺跡 18:新屋殿田遺跡 19:飯野小百苺遺跡 20:宮町遺跡
 21:小西北遺跡 22:三上遺跡 23:三上Ⅱ遺跡 24:金泉寺遺跡 25:小西遺跡 26:中富居遺跡 27:上飯野遺跡

第2図 周辺の遺跡分布図

第3章 調査の方法と成果 (発掘調査)

第1節 調査の方法

表土掘削は重機を使用し、遺構検出面(Ⅲ層)の上面まで掘削した。遺構番号は、通し番号の前に遺構の種類を記号で付し、「SD01」・「SE44」のように呼称した。遺構の測量は、断面図を手実測、平面図を電子平板で行い、縮尺は1/20とした。遺構の写真は、デジタル一眼レフカメラ(NikonD850)を使用し、RAWデータ撮影をした。全景写真はラジコンヘリによる空中写真とし、デジタルカメラ(Canon EOS 5D Mark IV)にて撮影した。

遺物注記は手書きにて行い、遺跡記号・遺構名・遺物番号・取上日を「YD SD01 230821」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタル一眼レフカメラ(NikonD850)を使用した。遺構図・遺物実測図・報告書作成ともにAdobe®Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF形式で入稿した。

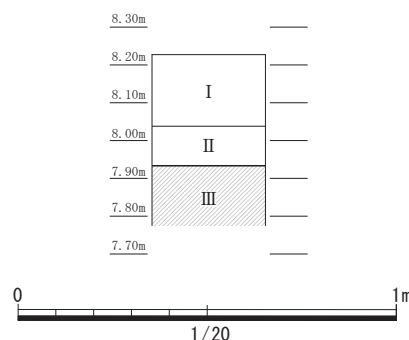
第2節 基本層序

調査地点の標高は8.2m前後で概ね平坦である。基本層序はⅠ～Ⅲ層を確認した(第3図)。

Ⅰ層：7.5YR5/1 褐灰色土 表土(耕作土)。粘土質で、Ⅱ層の小塊を含む。

Ⅱ層：7.5YR6/1 褐灰色土 Ⅲ層の小塊を含む。硬く締りがあり、下部に鉄分が沈着する。

Ⅲ層：2.5Y7/2 灰黄色土 遺構検出面(地山)。下部は白色が強くなる。



第3図 基本層序

第3節 遺構

検出した遺構は掘立柱建物3棟、柵2条、溝23条、土坑11基、井戸1基、ピット34基である。多くの遺構は出土遺物から古代のものと考えられる。調査区南側には東西方向の溝SD01・02、掘立柱建物SB1が重複し、古代遺構の変遷が想定される。調査区北側は遺構の分布が散漫で、掘立柱建物SB3、井戸SE44などが存在する。溝SD03は掘立柱建物SB1・2に付属する溝として扱う。

1 掘立柱建物

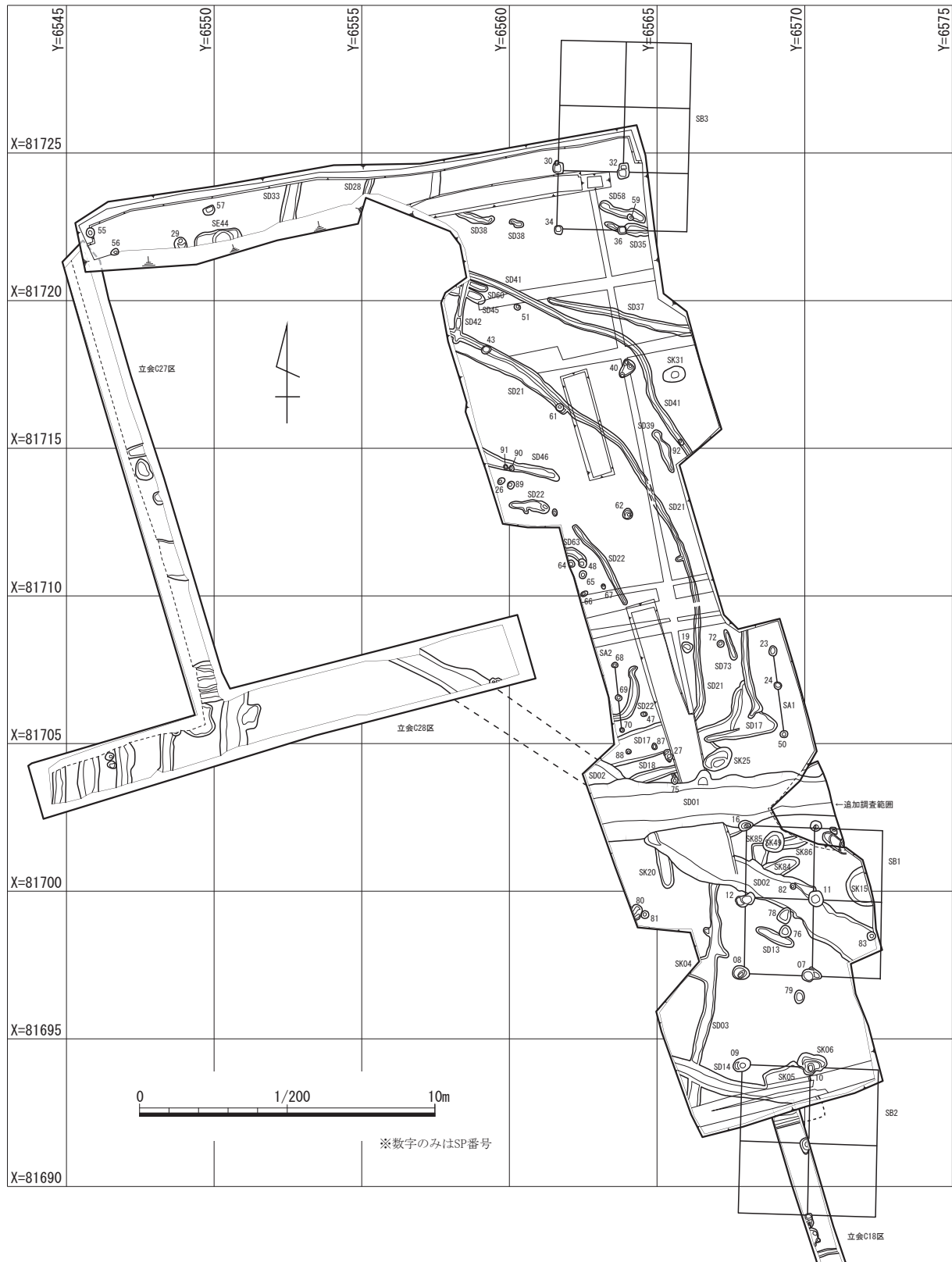
SB1・2(第5図、写真図版3) 調査時は2×3間の南北棟と考えていたが、柱間寸法や工事立会範囲での柱穴の広がりから、並列する2×2間の総柱建物を想定した(SB1・2)。両者は南北の柱筋がほぼ揃っており、出土遺物の時期も同じであることから、同時に存在した建物と考えられる。

SB1は6基の柱穴を検出し、柱穴の心々距離は東西2.3m、南北2.5mである。南北の方位はN-1°-Eを示す。柱穴掘方の規模は径37~66cmの円形基調で、深さは32~59cmである。SD01・02と重複し、SB1が新しい。遺物は各柱穴から古代の土師器壺・甕(1~4)・甕(5・6)が出土したほか、SP10・12から須恵器壺(7)・瓶(8)・甕も出土した。9世紀後半が主体である。

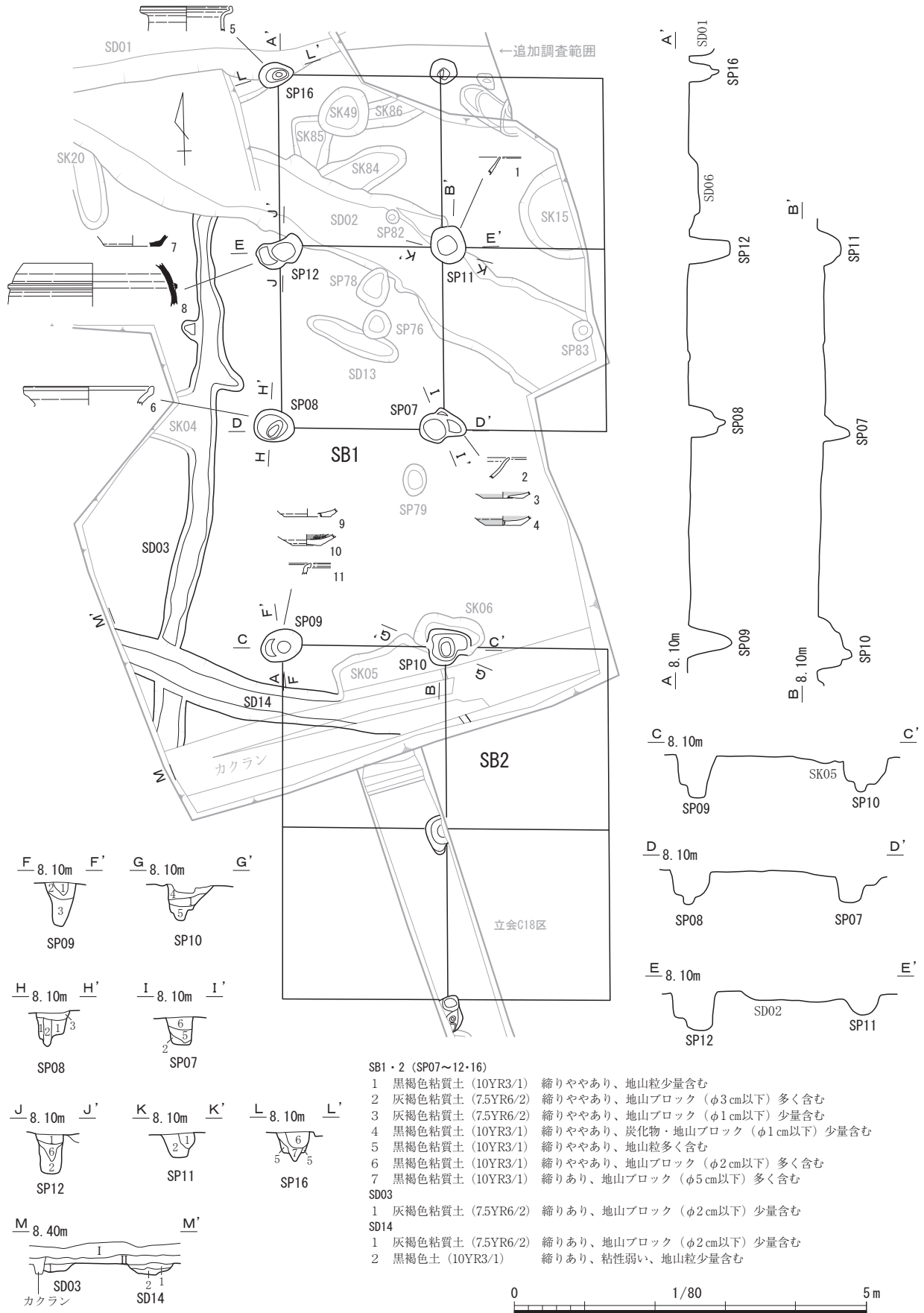
SB2はSB1の南側に3.0mの距離をおいて並ぶ。工事立会範囲を含めて4基の柱穴を検出し、柱穴の心々距離は東西2.3m、南北は2.5~2.6mである。南北の方位はN-1°-Eを示す。柱穴の規模は径45~62cmの円形基調で、深さは49~62cmである。遺物はSP09から土師器壺(9・10)・甕(11)、

SP10 から土師器甕、須恵器坏が出土した。9 世紀後半が主体である。

SB1・2 の西側を並走する SD03 は、幅 40 cm、深さ 8 cm の小規模な溝で、SB1・2 に伴う雨落ち溝と考えられる。古代の土師器が少量出土した。



第4図 調査区全体図



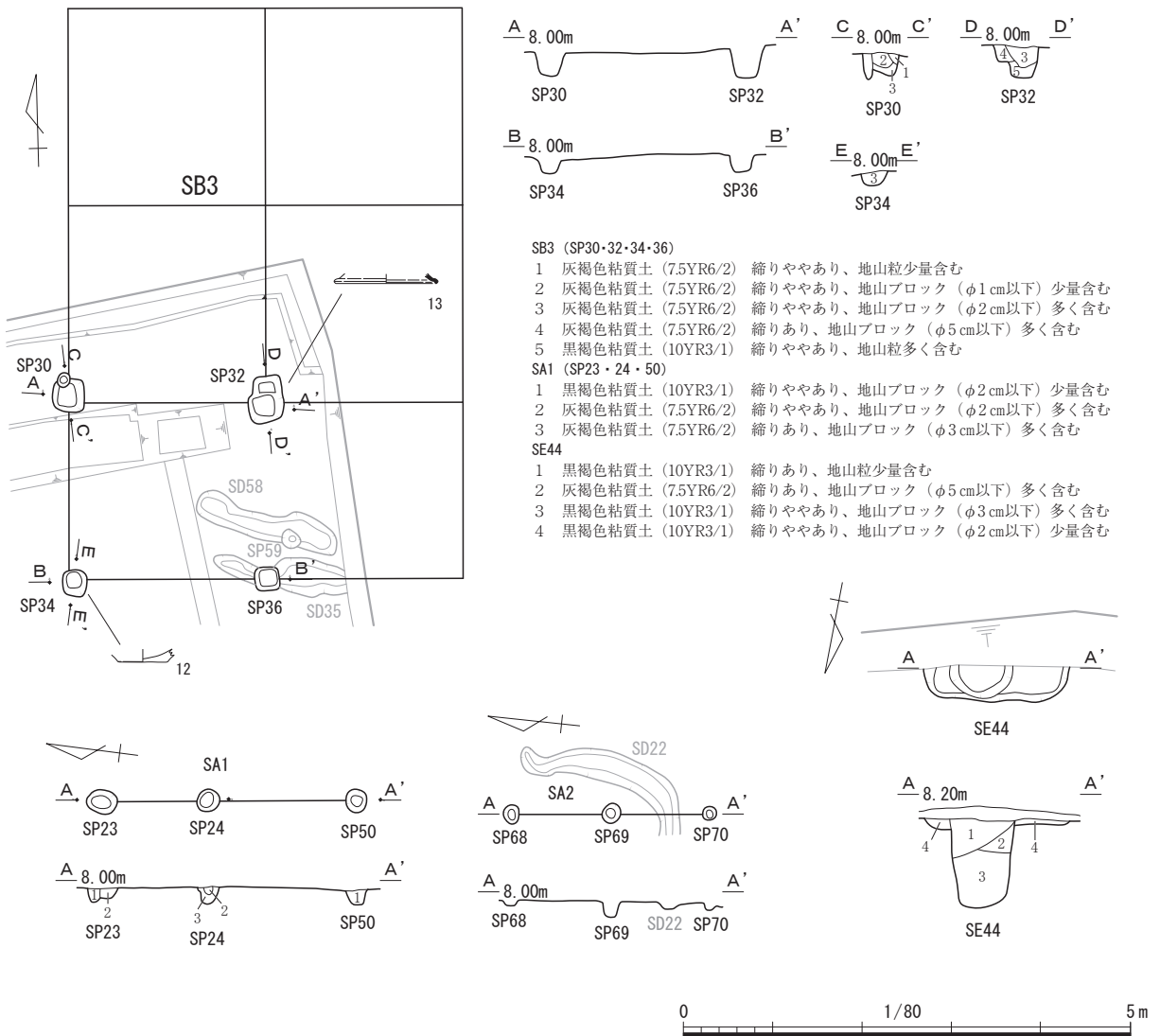
第5図 掘立柱建物SB1・2、溝SD03・14遺構図

SB3 (第6図、写真図版3) 2×2間程度の規模が想定されるが、全容は不明である。4基の柱穴は隅丸方形基調で、北側の2基 (SP30・32) は35～39 cm四方、深さは29～37 cmである。南側の2基 (SP34・36) は25～28 cm四方、深さ17～21 cmで規模が小さく、庇穴と考えられる。柱穴の心々距離は東西2.2 m、南北1.9 mで、南北の方位はN-1.5° -Eを示す。遺物はSP32から古代の須恵器蓋 (13)、SP34から古代の土師器壺 (12) が出土した。9世紀後半の建物と考えられる。

2 柵

SA1 (第6図) 3基の柱穴 (SP23・24・50) が南北に並ぶ。柱穴は径22～32 cmの円形基調で、深さ17～20 cmである。柱穴の心々距離はSP23-SP24間で1.1 m、SP24-SP50間で1.7 mである。主軸方位はN-7.5° -Wを示す。SP50から古代の土師器が出土した。

SA2 (第6図) 3基の柱穴 (SP68・69・70) が南北に並ぶ。柱穴は径16～23 cmの円形基調で、深さ6～18 cmである。柱穴の心々距離は1.1 mである。主軸方位はN-6° -Wを示す。出土遺物はなかった。



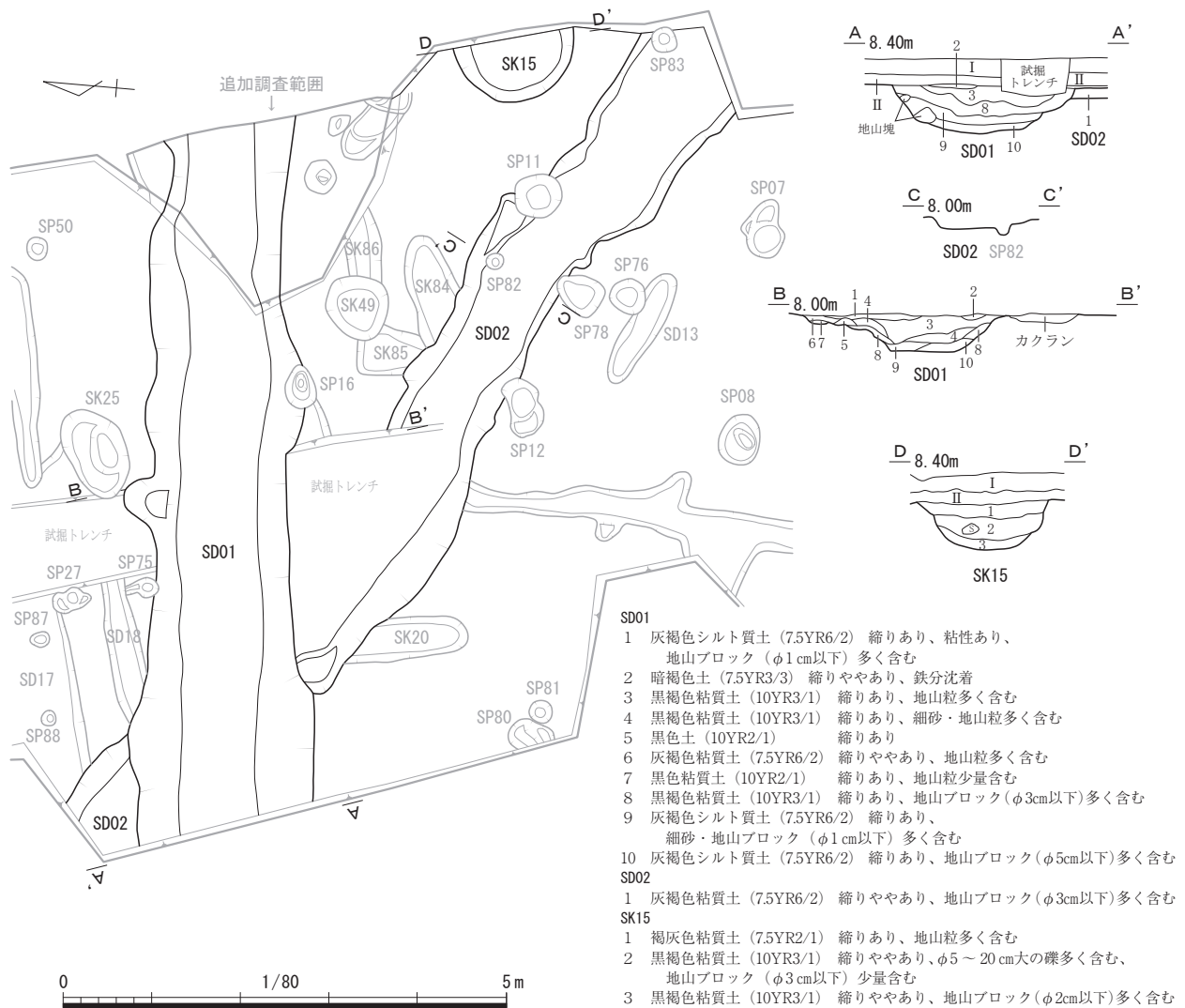
第6図 掘立柱建物 SB3、柵 SA1・2、井戸 SE44 遺構図

3 溝

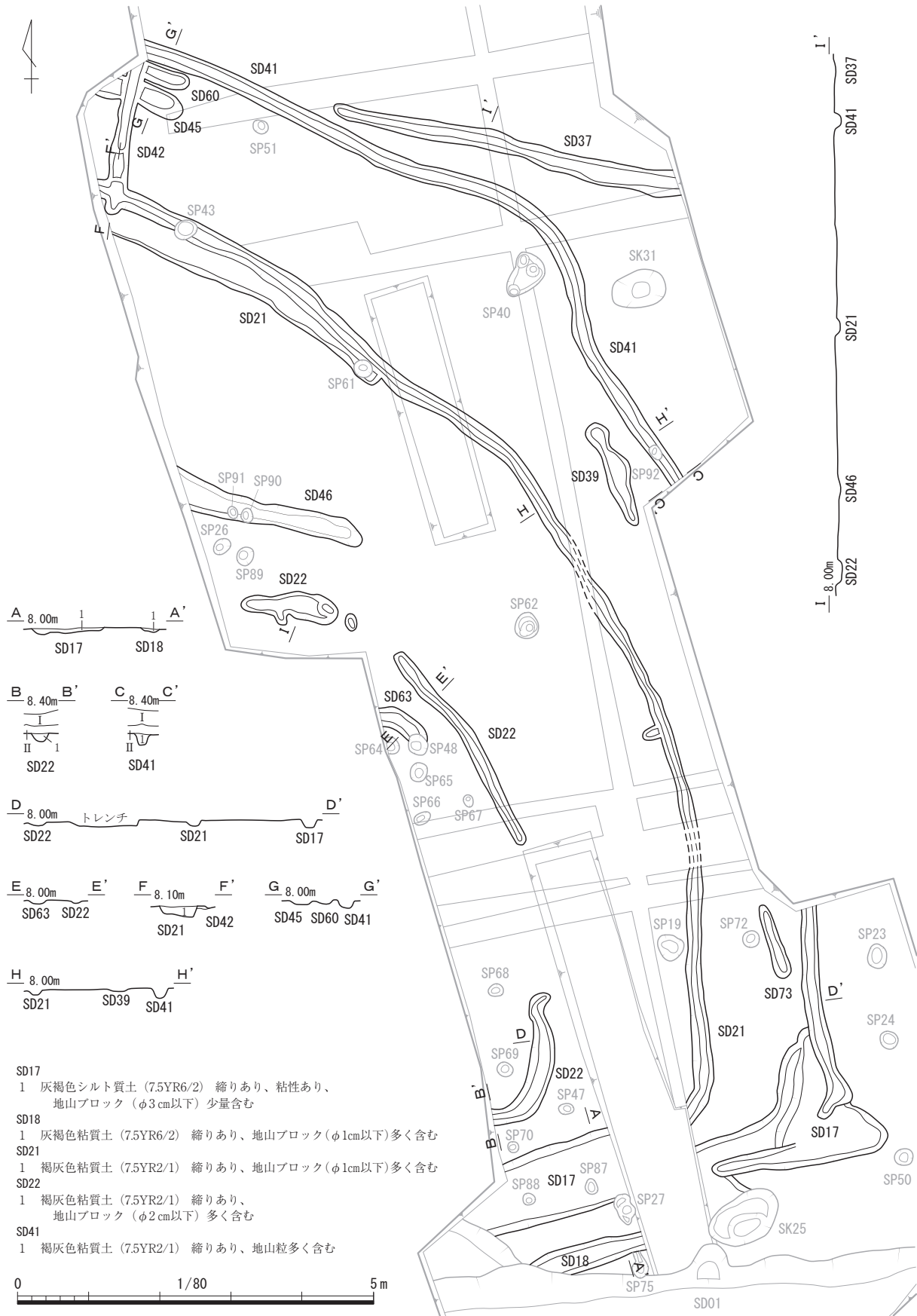
23条の溝を確認した。図示したもの以外は小規模で全長の短いものが多い。SD13・28・33・35・37～39・41・42・45・46で古代の土師器・須恵器が出土した。

SD01(第7図、写真図版3) 調査区を東西に横断する直線的な溝である。規模は上幅2.1m、下幅0.9m、深さ0.51mで、断面逆台形である。主軸方位はN-85°-Eを示す。覆土は下層が地山塊を含む灰褐色土、上層は黒褐色土である。重複関係からSD02より新しく、SB1より古い。遺物は古代の土師器壺(14～19)・甕(20～28)、須恵器蓋(29～31)・坏(32～37)・瓶(38)・甕、灰釉陶器壺(39)、轆羽口(40)が出土した。8世紀後半～9世紀のものである。

SD02(第7図、写真図版3) 南東から北西に直線的に延びる溝で、工事立会のC28区で北西側の延長が確認された。規模は上幅1.0～1.4m、下幅0.5～1.1m、深さ13cmで、南東側は削平のため幅が狭くなる。主軸方位はN-58°-Wを示す。切り合いはSD01・SB1より古い。遺物は古代の土師器甕、須恵器蓋(42)・坏、製塩土器(43)、鉄滓(44)のほか、非ロクロ成形の中世土師器皿(41)が1点だけ出土したが、8世紀後半が主体と考えられる。



第7図 溝SD01・02、土坑SK15遺構図



第8図 溝 SD17・18・21・22・37・39・41・42・45・46・60・63・73 遺構図

SD14 (第5図、写真図版3) SB2を横切って東西に延びる。SB1・2の雨落ち溝SD03と重複するが新旧は不明である。規模は上幅56cm、下幅28cm、深さ18cmで、断面逆台形である。主軸方位はN-68°-Wを示す。遺物は古代の土師器壺(46)・甕(47~49)、須恵器蓋(50)・坏(51)・壺(52)・甕が出土した。9世紀が主体で、8~10世紀のものがある。

SD17・21・22・41 (第8図、写真図版3) SD17・21・22は弧を描きながら並走し、南端はSD01に沿って西へ屈曲する溝である。SD41はSD17と一連の溝である。溝の規模は幅15~64cm、深さ2~18cmで、溝同士の距離は1.6~2.8mである。遺物はSD17から古代の土師器壺・甕、須恵器蓋(53)・坏(54)・壺(55)・甕、SD21から古代の土師器坏・甕、須恵器坏(56)、SD22から古代の土師器坏・甕(57)、SD41から古代の土師器坏・甕(60)、須恵器坏が出土した。9世紀のものである。

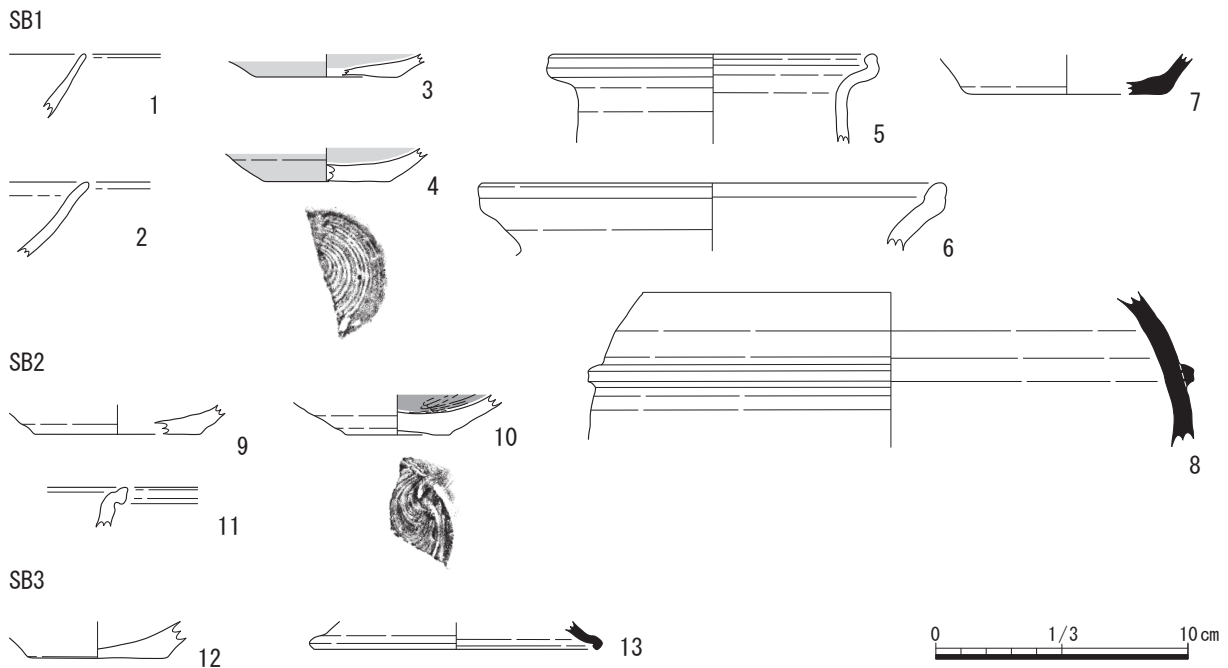
4 土坑

11基の土坑を確認した。図示したSK15以外には円形基調のもの(SK25・31・49)、長方形基調のもの(SK05・06・85)がある。遺物はSK04から越中瀬戸の播鉢(61)、SK05・06・20・25・49からは古代の土師器・須恵器が出土した(62~64・69)。

SK15 (第7図、写真図版3) 径1.4mの円形と想定される土坑である。深さ47cmである。覆土の中層は10~20cm大の礫を多く含み、古代の土師器壺(65)・甕(66)、須恵器坏・壺(67)・瓶(68)・甕が出土した。9世紀のものである。

5 井戸

SE44 (第6図、写真図版3) 推定1.6m四方の浅い掘り込みの中央にある、径70cmの円形、深さ97cmの素掘りの井戸である。遺物は古代の土師器甕、須恵器蓋(70)・坏が出土した。9世紀のものである。



第9図 掘立柱建物出土遺物図

6 ピット

掘立柱建物と柵のピットを除く 34 基のピットを検出した。SD01 より北側に散漫に分布する。円形のものほとんどで、方形基調のものは SP57 がある。規模は径 14 ～ 66 cm、深さは 7 ～ 35 cm の範囲である。遺物は SP29 から古代の土師器碗 (71) ・甕 (72) が出土した。

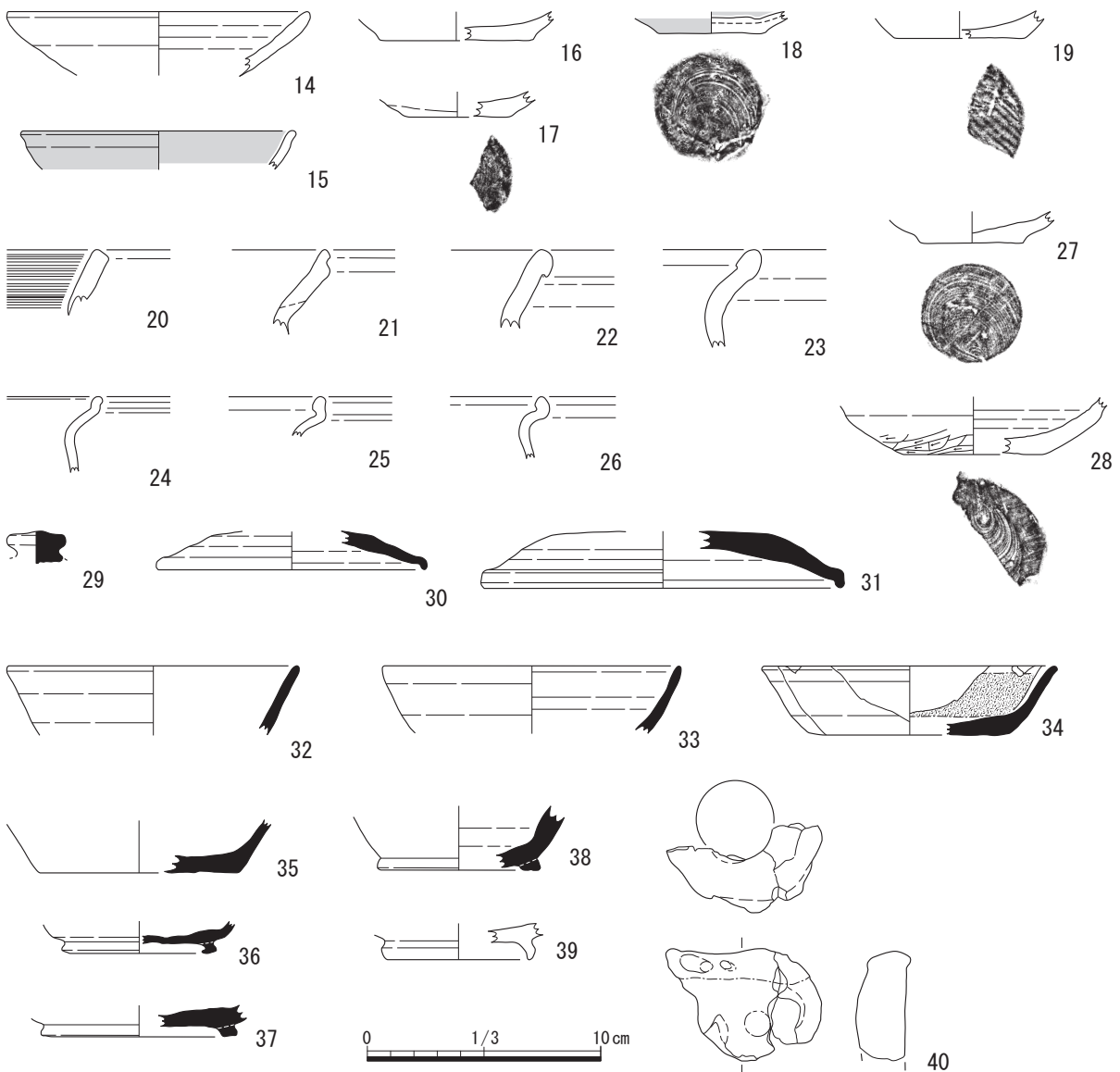
第4節 遺物

遺物は遺構出土遺物と遺構検出面出土遺物に分けられる。古代の土師器・須恵器が主体で、わずかに灰釉陶器、製塩土器、中世土師器、鉄製品、轡羽口、鉄滓がみられる。

1 遺構出土遺物

SB1 (第9図、写真図版5) 1～6は古代土師器である。1～4は碗で、底部は回転糸切りである。3・4は内外面に赤彩を施す。5・6はロクロ成形の甕で、煤の付着がみられる。9世紀後半のものである。

SD01



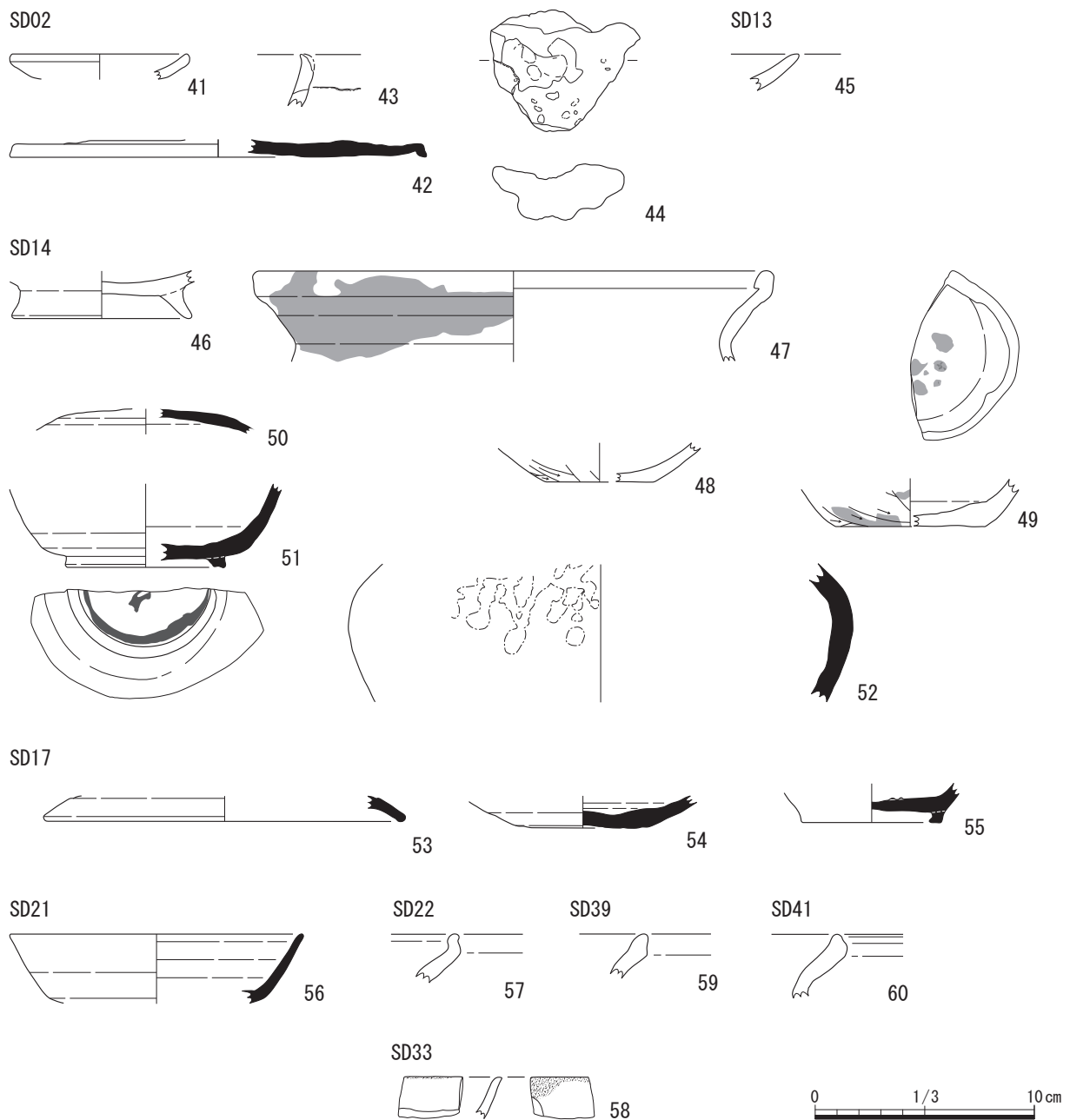
第10図 溝出土遺物図(1)

7・8は須恵器である。7は坏、8は胴部に突帯が廻る瓶である。いずれも9世紀のものである。

SB2(第9図、写真図版5) 9～11は土師器である。9・10は回転糸切りの埴である。10は内面に黒色処理を施す。9世紀後半のものである。11はロクロ成形の甕で、9世紀のもの。

SB3(第9図、写真図版5) 12は土師器の埴である。底部は回転糸切りである。13は須恵器の蓋である。いずれも9世紀後半のものである。

SD01(第10図、写真図版5・6) 14～28は古代の土師器である。14～19はロクロ成形の埴で、9世紀後半のものが多い。口縁部は、肥厚するもの(14)、短く外反するもの(15)がある。底部は回転糸切り(17・18)、板状圧痕の残るもの(19)がある。15・18は内外面に赤彩を施す。20～28はロクロ成形の甕である。口縁部は面取りするもの(20)、上部へ突出するもの(21)、内側ないし

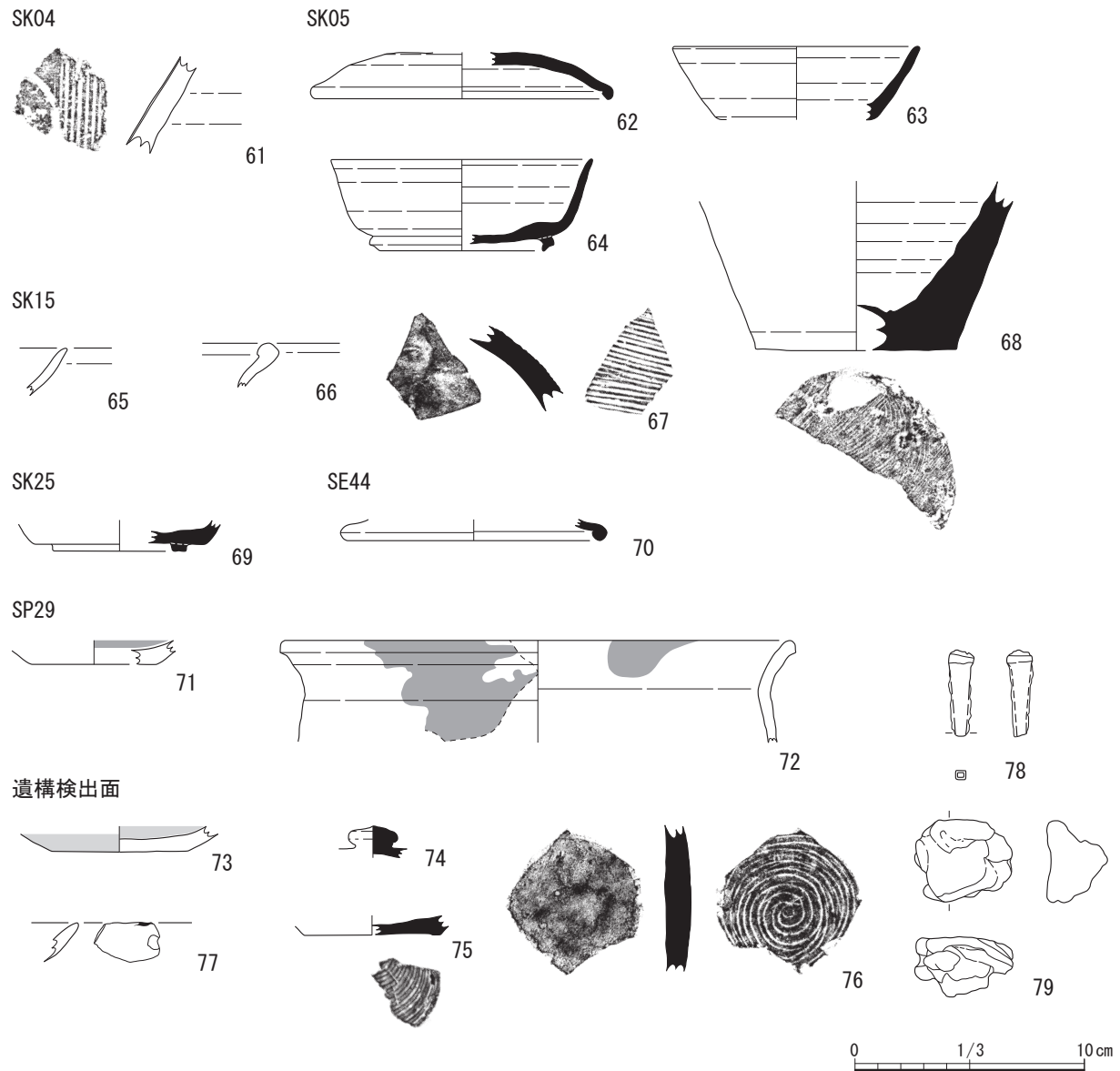


第11図 溝出土遺物図(2)

外側に折り返すもの(22・23)、屈曲させるもの(24～26)があり、20は内面にカキメ調整が残る。底部は回転糸切りである(27・28)。28は胴部下端にヘラケズリ調整を施す。8世紀の20・28以外は9世紀のものである。29～38は須恵器である。29～31は蓋である。31は天井部内面にナデを施す。8世紀後半のもの。32～37は坏で、36・37は坏Bである。34は口縁部に打ち欠きと油煙の付着があり、灯明皿に転用されている。34は胎土に海綿骨針を含む。8世紀後半の34以外は9世紀のものである。38は瓶の底部で、低い高台が付く。9世紀のもの。39は灰釉陶器の埴である。三日月形の高台が付く。40は鞆羽口の端部で、孔径は推定3.3cmである。端部は発泡し、ガラス質化している。

SD02(第11図、写真図版6) 41は中世土師器の皿で、口径8.0cmに復元される。非ロクロ成形である。13世紀後半～14世紀のもの。42は須恵器蓋である。頂部は平坦でロクロ削りを施す。8世紀後半のもの。43は製塩土器である。棒状尖底タイプの口縁部とみられ、被熱と輪積み痕が顕著である。44は椀形を呈する鉄滓である。

SD13(第11図、写真図版6) 45は中世土師器の皿である。非ロクロ成形で、13世紀後半～14世



第12図 土坑・井戸・ピット・遺構検出面出土遺物図

紀のもの。

SD14 (第11図、写真図版6) 46～49は土師器である。46は高台の付く壺で、9～10世紀のもの。47～49はロクロ成形の甕である。47は口縁端部を巻き込む形態で9世紀後半のもの。48・49は胴部外面下部から底部にかけて手持ちケズリを施す。8世紀のものか。50～52は須恵器で、9世紀代のものである。50は蓋、51は坏Bである。51の底部外面には墨痕が残る。52は短頸壺の胴部で、肩に自然釉が掛かる。

SD17 (第11図、写真図版6) 53～55は須恵器である。53は蓋、54は坏、55は壺である。9世紀のもの。

SD21 (第11図、写真図版6) 56は須恵器坏である。9世紀前半のものである。

SD22 (第11図、写真図版6) 57はロクロ成形の土師器甕で、口縁端部を屈曲させる。9世紀のものである。

SD33 (第11図、写真図版6) 58は土師器の壺で、口縁部に油煙が付着する。9世紀のもの。

SD39 (第11図、写真図版6) 59はロクロ成形の土師器甕である。9世紀のもの。

SD41 (第11図、写真図版6) 60はロクロ成形の土師器甕である。9世紀のもの。

SK04 (第12図、写真図版5) 61は越中瀬戸の播鉢である。錆釉の掛かる胴部に卸目が残る。

SK05 (第12図、写真図版5) 62～64は須恵器である。62は口縁部の内面に稜のある蓋で、頂部内面にナデを施す。63・64は坏である。いずれも8世紀後半～9世紀前半のものである。

SK15 (第12図、写真図版5) 65・66は土師器である。65は壺である。66はロクロ成形の甕で、口縁部を巻き込む形態である。9世紀のものである。67・68は須恵器である。67の壺は胴部肩にカキメを施す。68は瓶の下半部で、胴部はロクロナデ、底部は回転糸切りである。9世紀のもの。

SK25 (第12図、写真図版5) 69は須恵器の坏Bである。9世紀のもの。

SE44 (第12図、写真図版5) 70は須恵器の蓋である。9世紀のもの。

SP29 (第12図、写真図版6) 71・72は土師器である。71は黒色土器の壺で、9世紀のもの。72はロクロ成形の甕で、口頸部に煤が付着する。8世紀後半のものである。

2 遺構検出面出土遺物

遺構検出時に出土した遺物である(第12図、写真図版6)。73は土師器の壺で、内外面に赤彩を施す。8世紀後半～9世紀前半のものである。74～76は須恵器である。74は扁平な擬宝珠形をした蓋の摘みである。75は回転糸切り底の坏で、9世紀後半のもの。76は横瓶の胴部片で、内面の縁辺に細かい打ち欠きが見られる。77は中世土師器の皿である。口縁部外面に油煙が付着する。14世紀のものか。78は鉄製の角釘、79は鉄滓である。 (常深)

第1表 遺物観察表(1)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法量(cm) ()は推定値、◇は残存値			色調 外面	胎土	焼成	成・整形ほか	備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)					
1	SP11 (SB1)	土師器	壺	-	-	(2.55)	2.5Y7/3 浅黄	やや密、石英・ 白色粒	普通	内外面摩耗	
2	SP07 (SB1)	土師器	壺	-	-	(2.95)	7.5YR7/3 にぶい橙	やや密、白色粒・ 赤褐色粒	普通	内外面摩耗	
3	SP07 (SB1)	土師器	壺	-	(5.6)	(0.90)	5YR6/6 橙	やや密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 内外面赤彩	
4	SP07 (SB1)	土師器	壺	-	(5.0)	(1.35)	10YR8/2 灰白	密、石英・白色粒・ 海綿骨針	良好	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り、 内外面赤彩	
5	SP16 (SB1)	土師器	甕	(12.6)	-	(3.55)	10YR5/2 灰黄褐	やや密、石英・ 白色粒	良好	内外面ロクロナデ、外面に煤付着	
6	SP08 (SB1)	土師器	甕	(18.2)	-	(2.70)	7.5YR6/3 にぶい褐	やや密、石英・ 白色粒	良好	内外面ロクロナデ、口縁部の一部煤付着	

第2表 遺物観察表(2)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法量(cm) (○)は推定値、◇は残存値			色調 外面	胎土	焼成	成・整形ほか	備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)					
7	SP12 (SB1)	須恵器	坏	-	(8.0)	(1.60)	2.5Y5/1 黄灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
8	SP12 (SB1)	須恵器	瓶	-	-	(6.20)	5Y5/1 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
9	SP09 (SB2)	土師器	埴	-	(6.6)	(1.65)	2.5Y4/1 黄灰	密、石英	良好	内外面ロクロナデ、底部回転系切り	
10	SP09 (SB2)	土師器	埴	-	(4.2)	(1.60)	10YR5/3 にぶい黄褐	やや密、石英・ 白色粒	良好	底部回転系切り、体部外面ロクロナデ、 体部～底部内面ミガキ・黒色処理	
11	SP09 (SB2)	土師器	甕	-	-	(1.60)	10YR8/3 浅黄橙	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
12	SP34 (SB3)	土師器	埴	-	(5.6)	(1.45)	7.5YR7/4 にぶい橙	密、白色粒	良好	内外面摩耗、底部回転系切りか	
13	SP32 (SB3)	須恵器	蓋	(11.2)	-	(1.10)	5Y4/1 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
14	SD01	土師器	埴	(12.8)	-	(2.75)	5YR7/6 橙	やや密、石英・ 白色粒・褐色粒	普通	内外面ロクロナデ	
15	SD01	土師器	埴	(11.6)	-	(1.65)	7.5YR8/3 浅黄橙	やや密、石英	良好	内外面ロクロナデ、内外面赤彩	
16	SD01	土師器	埴	-	(6.6)	(1.25)	5YR7/6 橙	密、石英・褐色 粒	良好	内外面摩耗	
17	SD01	土師器	埴	-	(4.6)	(1.10)	10YR6/3 にぶい黄褐	やや密、石英・ 白色粒	良好	内外面ロクロナデ、底部回転系切り	
18	SD01	土師器	埴	-	4.6	(0.95)	7.5YR8/4 浅黄橙	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ、底部回転系切り、内 外面赤彩	
19	SD01	土師器	埴	-	(5.6)	(1.20)	7.5YR6/3 にぶい褐	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ、底部板状圧痕	
20	SD01	土師器	甕	-	-	(2.80)	7.5YR7/4 にぶい橙	密、石英・白色 粒	良好	外面摩耗、口縁部内面カキメ	
21	SD01	土師器	甕	-	-	(3.65)	7.5YR8/3 浅黄橙	密、石英・白色 粒	良好	外面ロクロナデ、内面摩耗	
22	SD01	土師器	甕	-	-	(3.35)	7.5YR8/3 浅黄橙	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
23	SD01	土師器	甕	-	-	(4.20)	5YR7/4 にぶい橙	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
24	SD01	土師器	甕	-	-	(3.25)	5YR6/4 にぶい橙	やや密、石英	普通	内外面摩耗	
25	SD01	土師器	甕	-	-	(1.70)	7.5YR6/3 にぶい褐	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
26	SD01	土師器	甕	-	-	(2.65)	5YR7/4 にぶい橙	やや密、石英・ 白色粒	良好	外面ロクロナデ、内面摩耗	
27	SD01	土師器	甕	-	4.4	(1.35)	5YR7/6 橙	密、白色粒・褐 色粒・雲母	良好	内外面ロクロナデ、底部回転系切り	
28	SD01	土師器	甕	-	(6.0)	(2.45)	7.5YR7/3 にぶい橙	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ、外面胴部下端削り、 底部回転系切り	
29	SD01	須恵器	蓋	-	-	(1.35)	N6/0 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
30	SD01	須恵器	蓋	(11.4)	-	(1.65)	5Y6/1 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
31	SD01	須恵器	蓋	(15.4)	-	(2.45)	5Y6/1 灰	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ、天井部内外面不定方 向ナデ	
32	SD01	須恵器	坏	(12.4)	-	(3.00)	5Y7/1 灰白	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
33	SD01	須恵器	坏	(12.6)	-	(2.90)	10Y5/1 灰	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
34	SD01	須恵器	坏 (灯明皿)	(12.5)	(8.6)	2.95	5Y5/1 灰	密、微量の海绵 骨針	良好	内外面ロクロナデ、口縁打ち欠き部周辺 に油煙付着	
35	SD01	須恵器	坏	-	(8.6)	(2.30)	5Y6/1 灰	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
36	SD01	須恵器	坏B	-	(6.6)	(1.40)	2.5Y8/1 灰白	やや密、石英	普通	内外面ロクロナデ	
37	SD01	須恵器	坏B	-	(8.4)	(1.35)	2.5Y6/1 黄灰	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ	
38	SD01	須恵器	瓶か	-	(7.0)	(2.75)	N5/0 灰	密、石英・白色 粒(多)	良好	内外面ロクロナデ	
39	SD01	灰釉陶器	埴か	-	(6.1)	(1.55)	5Y7/1 灰白	緻密	良好	内外面ロクロナデ	
40	SD01	土製品	羽口	残長 4.8	残幅 6.7	-	7.5YR5/1 褐灰	粗、白色粒・ス サ	普通	端部ガラス質化・発泡	
41	SD02	中世土師器	皿	(8.0)	-	(1.15)	7.5YR7/3 にぶい橙	密、白色粒・褐 色粒・雲母	良好	非ロクロ成形、内外面摩耗	
42	SD01・ SD02	須恵器	蓋	(18.9)	-	(0.80)	N6/0 灰	密、石英・白色 粒	良好	内外面ロクロナデ、天井部外面回転ヘ ラケズリ、天井部内面ナデ	
43	SD02	製塩土器		-	-	(2.40)	5YR7/6 橙	粗、石英・白色粒・ 微量の海绵骨針	普通	外面に輪積み痕、内外面被熱	

第3表 遺物観察表(3)

番号	出土遺構 層位	種別	器種等	法量(cm)			色調 外面	胎土	焼成	成・整形ほか	備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)					
44	SD02	鉄滓		残長 5.5	残幅 6.85	残厚 2.55					重さ 92.80g
45	SD13	中世土師器	皿	-	-	(1.65)	7.5YR7/4 にぶい橙	密、白色粒	普通	非ロクロ成形、内外面摩耗	
46	SD14	土師器	埴	-	(7.9)	(2.20)	2.5YR6/6 橙	やや密、石英・雲 母・白色粒	普通	内外面ロクロナデ	
47	SD14	土師器	甕	(23.1)	-	(4.15)	7.5YR8/4 浅黄橙	密、石英・白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
48	SD14	土師器	甕	-	(5.0)	(1.80)	10YR7/3 にぶい黄橙	密、石英・白色粒	良好	外面胴部下端～底部ヘラケズリ、内面 ロクロナデ	
49	SD14	土師器	甕	-	(6.8)	(2.20)	10YR8/3 浅黄橙	密、石英	良好	外面胴部下端～底部ヘラケズリ、内面 ロクロナデ、内外面に煤付着	
50	SD14	須恵器	蓋	-	-	(1.15)	10Y6/1 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
51	SD14	須恵器	坏 B	-	(7.2)	(3.80)	7.5Y6/1 灰	普通、白色粒	普通	内外面ロクロナデ、底部外面に墨痕	
52	SD14	須恵器	短頸壺か	-	-	(6.30)	N5/0 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ、外面に自然釉	
53	SD17	須恵器	蓋	(15.9)	-	(1.15)	5Y4/1 灰	密、石英	良好	内外面ロクロナデ、内面に自然釉	
54	SD17	須恵器	坏	-	(6.2)	(1.45)	7.5Y6/1 灰	密	良好	内外面ロクロナデ	
55	SD17	須恵器	壺か	-	(6.4)	(1.80)	10YR5/1 褐灰	密、石英	良好	内外面ロクロナデ、内面に自然釉	
56	SD21	須恵器	坏	(13.3)	-	(3.15)	10YR6/3 にぶい黄橙	密、白色粒	不良	内外面ロクロナデ	
57	SD22	土師器	甕	-	-	(2.20)	10YR6/3 にぶい黄橙	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ、外面に煤付着	
58	SD33	土師器	埴 (灯明皿)	-	-	(1.90)	10YR6/2 灰黄褐	密、石英	良好	内外面ロクロナデ、口縁部に油煙付着	
59	SD39	土師器	甕	-	-	(2.05)	10YR8/2 灰白	密、石英	良好	内外面摩耗	
60	SD41	土師器	甕	-	-	(2.90)	7.5YR8/4 浅黄橙	密、石英・白色粒	良好	内外面ロクロナデ(摩耗)	
61	SK04	越中瀬戸	播鉢	-	-	(4.25)	2.5YR4/2 灰赤	やや密、石英・白 色粒	良好	内外面ロクロナデ、御目は8条以上、 内外面錆釉	
62	SK05	須恵器	蓋	(12.7)	-	(2.00)	N6/0 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ、天井部内面不定方 向ナデ	
63	SK05	須恵器	坏	(10.6)	-	(3.20)	2.5Y5/1 黄灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
64	SK05	須恵器	坏 B	(11.3)	(7.2)	4.00	N5/0 灰	密、白色粒、微量 の海綿骨針	良好	内外面ロクロナデ	
65	SK15	土師器	埴	-	-	(2.10)	5YR7/4 にぶい橙	密、褐色粒	普通	内外面摩耗	
66	SK15	土師器	甕	-	-	(1.90)	10YR5/2 灰黄褐	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
67	SK15	須恵器	壺	-	-	(3.65)	10YR4/1 褐灰	密、石英・白色粒	普通	外面カキメ、内面当て具痕か	
68	SK15	須恵器	瓶	-	(8.8)	(7.40)	N5/0 灰	やや密、石英・白 色粒	良好	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	
69	SK25	須恵器	坏 B	-	(5.8)	(1.35)	N4/0 灰	密、白色粒(多)	良好	内外面ロクロナデ	
70	SE44	須恵器	蓋	(11.0)	-	(0.90)	5Y5/1 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ	
71	SP29	土師器	埴	-	(5.4)	(1.05)	10YR7/2 にぶい黄橙	密、石英・白色粒	良好	体部外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒 色処理	
72	SP29	土師器	甕	(22.0)	-	(4.45)	10YR7/3 にぶい黄橙	密、石英	良好	内外面ロクロナデ・煤付着	
73	遺構 検出面	土師器	埴	-	(6.0)	(0.75)	7.5YR6/4 にぶい橙	密	良好	内外面ロクロナデ(摩耗)・赤彩	
74	遺構 検出面	須恵器	蓋	-	-	(1.40)	7.5Y5/1 灰	密、白色粒	良好	外面ロクロナデ、天井部内面ナデ	
75	遺構 検出面	須恵器	坏	-	(6.0)	(0.85)	5Y5/1 灰	密、白色粒	良好	内外面ロクロナデ、底部回転糸切り	
76	遺構 検出面	須恵器	横瓶 (加工円盤)	-	-	(6.35)	2.5Y3/1 黒褐	密、石英・白色粒	良好	胴部外面カキメ、内面ナデ、内面外周 に細かい打ち欠き	
77	遺構 検出面	中世土師器	皿 (灯明皿)	-	-	(1.70)	7.5YR6/6 橙	密	良好	内外面摩耗、口縁部外面に油煙付着	
78	遺構 検出面	鉄製品	角釘	残長 3.75	残幅 1.0	残厚 1.10					重さ 2.84g
79	遺構 検出面	鉄滓		残長 3.6	残幅 4.25	残厚 2.65		磁着あり			重さ 43.36g。

第4章 調査の概要（試掘調査・工事立会）

第1節 調査の方法

試掘調査は、重機で遺構面直上まで掘削し、遺構の有無を確認しながら行った。検出した遺構は、半截して遺物の有無を確認した後に埋戻しを行った。

工事立会は道路側溝、下水管、擁壁、水路の工事掘削を対象に実施した。重機で遺構面直上まで掘削した後、ジョレンで人力による遺構検出を行い、移植ゴテで遺構を完掘した。一部の遺構は半截し、断面の写真撮影を行った後に完掘した。

第2節 調査成果の概要

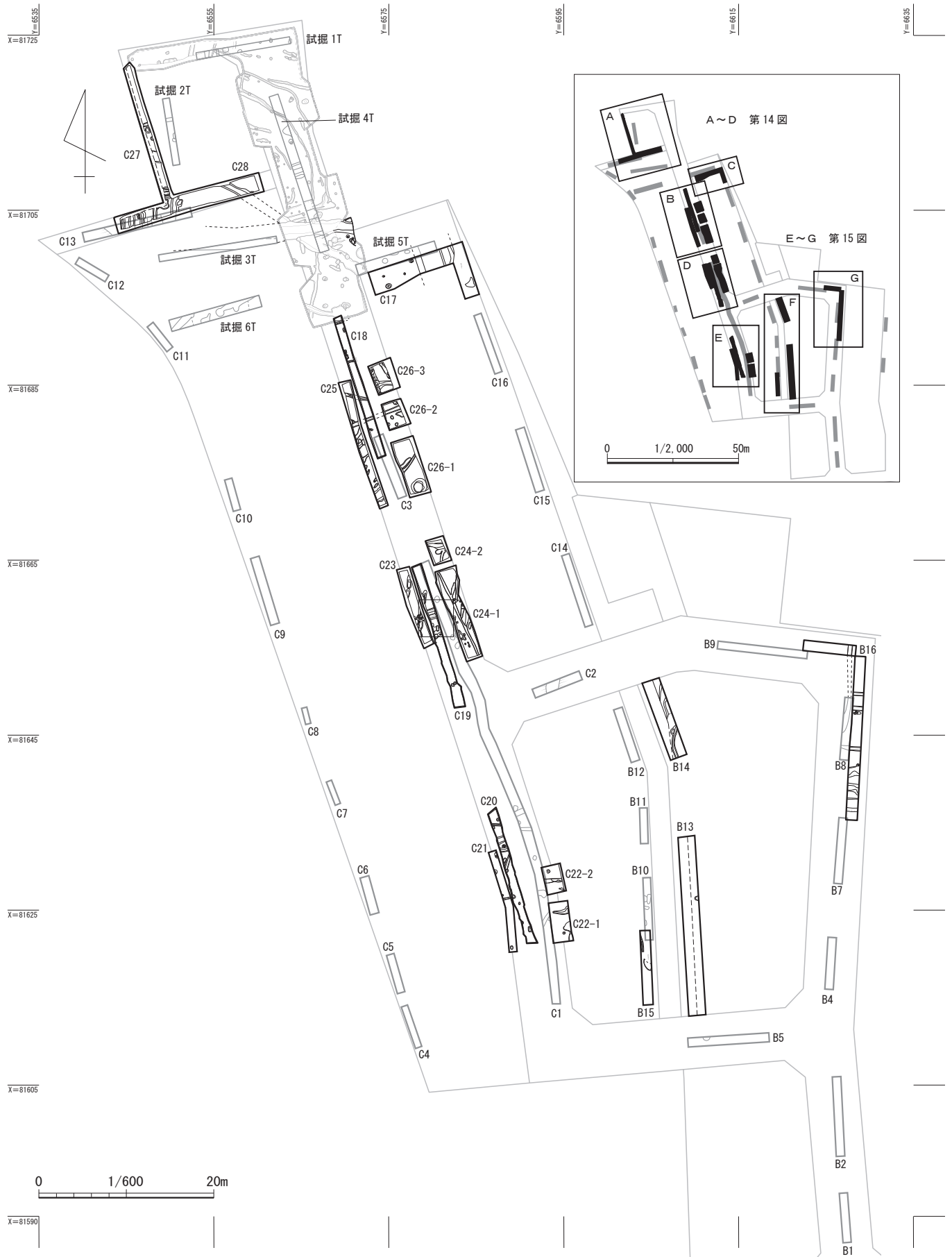
検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝61条（小溝群含む）、土坑46基、井戸1基、ピット27基、不明遺構7基である。古代の遺構が大半を占める。開発予定地西部では、現在の用水路に向かって地山が落ち込み、旧河川が存在が推測される。開発予定地東部は、近世に削平を受けており、遺構の遺存状態は悪い。遺物は9世紀代のものが多く、墨書土器2点、黒色土器などが出土した。中世は珠洲の播鉢、青磁碗のみである。ほか土錘や砥石が出土した。遺物が出土した遺構を中心に第4・5表のとおり報告する。また、主な出土遺物は写真図版7に掲載した。（泉田）

第4表 試掘調査・工事立会で確認された遺構・遺物（1）

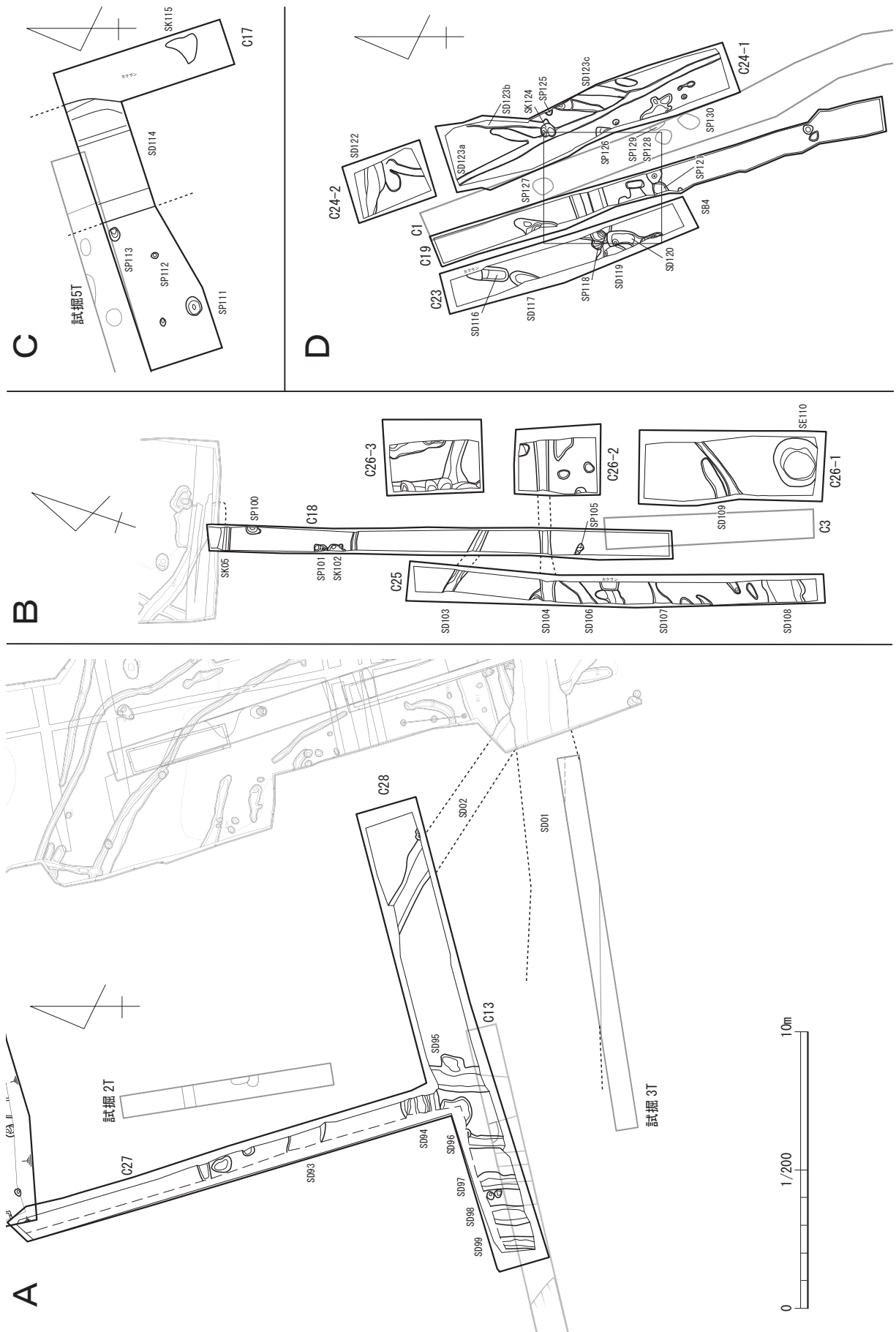
図	遺構	区	平面形	遺構規模(m)			土層	種別(遺物番号)	備考
				長径・長さ (検出値)	短径・幅 (検出値)	深さ (検出値)			
第14図 B	SK05 (発掘調査)	C18		(1.10)	1.70 (発掘調査合 算)	0.15~0.21	黒褐色ブロッ クまじり	須恵器 坏A・坏B・坏蓋 土師器 甕 黒色土器(80)	
	SD93	C27		(1.30)	(0.50)	0.05未満	暗褐色	須恵器 坏B(82)・坏蓋(81) 土師器片	
第14図 A	SD94	C27		(0.70)	1.40	0.13~0.18	暗褐色	須恵器 甕 土師器 甕	
	SD95	C28		(1.60)	0.90~1.80	0.25	黒褐色	須恵器 坏A(83) 土師器 甕	
	SD96	C28		(1.20)	0.40	0.15	暗褐色	土師器片	畠跡か
	SD97	C28		(1.30)	0.60	0.16	暗褐色	土師器 甕	畠跡か
	SD98	C28		(1.10)	0.60	0.22	暗褐色	土師器 甕(84・85)	畠跡か 84・85:9世紀中頃
	SD99	C28		(1.10)	0.50	0.20	暗褐色	土師器片	畠跡か
	SP100	C18	楕円形		0.52	(0.26)	0.26	黒褐色	土師器 小型甕・甕
SP101	C18	楕円形		0.52	(0.27)	0.24	暗灰色	須恵器 台付壺(86) 土師器片	SB2(発掘調査)
第14図 B	SK102	C18	楕円形	(0.67)	(0.20~ 0.23)	0.02~0.10	暗褐色	須恵器 坏蓋(87) 土師器片	
	SD103	C18・C25		(2.50)	0.38	0.20~0.30	黒褐色	土師器 甕	
	SD104	C18・C25 C26-2		(5.80)	0.40~0.56	0.15~0.30	暗褐色ブロッ クまじり	須恵器 坏 土師器 坑・甕(88)	
	SP105	C18	楕円形	(0.42)	(0.16)	0.10	暗~黒褐色	土師器 甕	
	SD106	C25		(1.22)	0.38	0.10	赤~暗褐色	土師器 甕(89)	
	SD107	C25		(0.95)	0.26~0.57	0.05~0.10	暗褐色	須恵器 坏 土師器 甕 越中瀬戸	
	SD108	C25		(1.02)	1.43	0.14	暗褐色	須恵器 坏蓋(90) 土師器 甕 石製品	
	SD109	C26-1		(1.58)	0.18~0.30	0.05~0.10	黒褐色	土師器 甕	
	SE110	C26-1	不整 円形	1.77~1.86	-	1.00	黒褐色	須恵器片 土師器 坑(墨書「□」)(92)・甕(91) 砥石(93)、ひょうたん底部	91:10世紀代
	第14図 C	SP111	C17	楕円形	0.70	0.53	0.50	黒褐色	土師器片 近代磁器
SP112		C17	円形	0.20	-	0.18	黒褐色	土師器片	
SP113		C17	楕円形	0.48	0.36	(0.24)	黒褐色	土師器 甕	
SD114		C17		(2.00)	(0.42~ 0.45)	(0.10~ 0.20)	暗灰色	須恵器 坏B(94)・甕 土師器 甕、珠洲 播鉢(95)	
SK115		C17	不整 円形	(1.05)	(0.80)	0.05未満	黒褐色ブロッ クまじり	須恵器 坏B・甕 土師器 小型甕(96)・甕(97)・壺	

第5表 試掘調査・工事立会で確認された遺構・遺物(2)

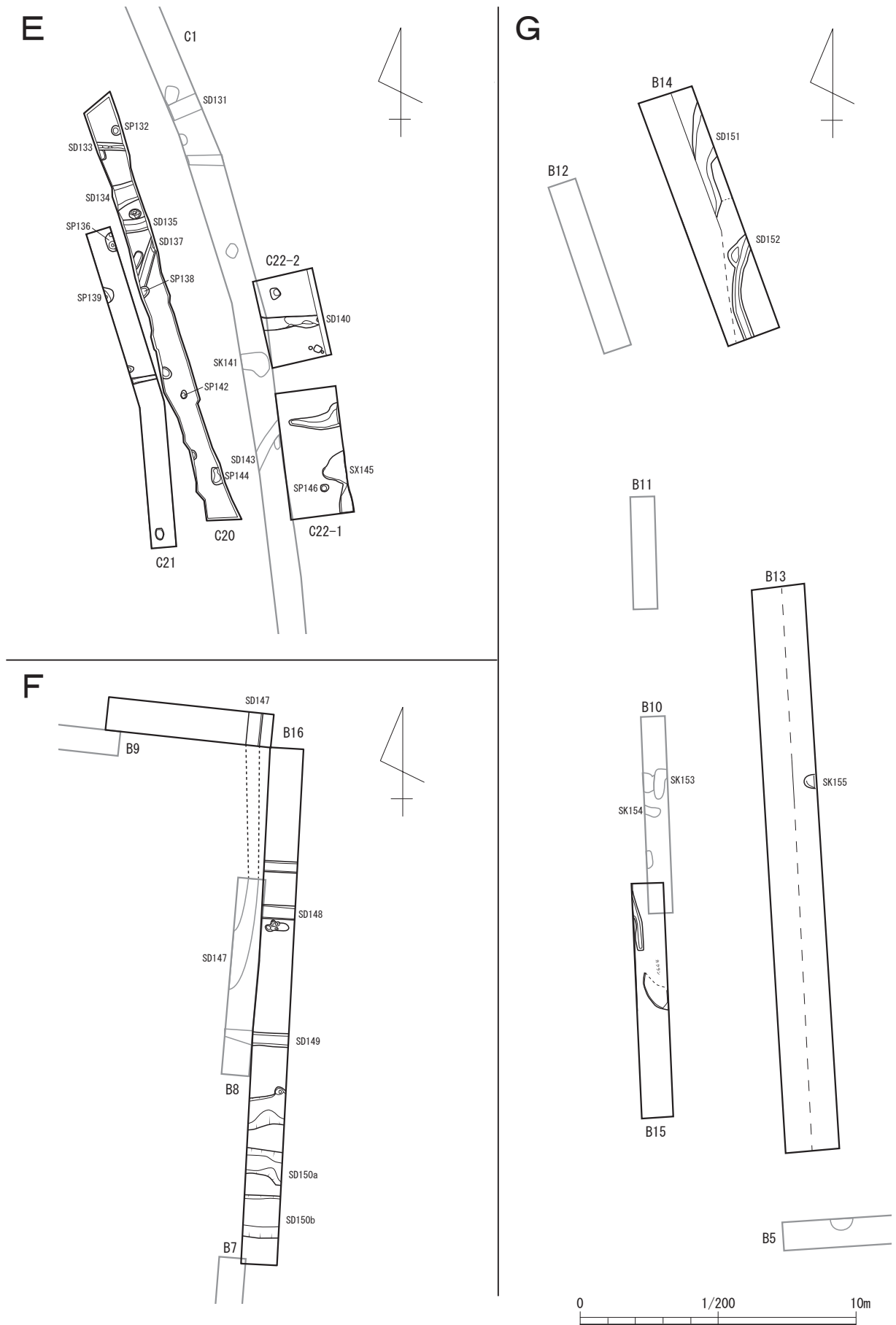
図	遺構	区	平面形	遺構規模(m)			土層	種別(遺物番号)	備考
				長径・長さ (検出値)	短径・幅 (検出値)	深さ (検出値)			
第14図 D	SD116	C23		(0.94)	0.48	0.12	黒褐色	土師器 壺(98)	畠跡か
	SD117	C23		(0.75)	0.44	0.20	暗褐色	土師器片	畠跡か
	SP118	C23	円形	0.40	-	0.35	暗灰色	須恵器 壺(墨書「八」)(99) 近世陶器片	99:9世紀初頭 SB4 SP118→SD119→SD120か
	SD119	C23		(1.00)	(1.20)	0.05~0.20	暗灰色	須恵器 坏B・坏蓋・甕 土師器片、近世陶器片	
	SD120	C23		(14.20)	0.43	0.20~0.25	黒褐色	須恵器 坏蓋	畠跡か
	SP121	C19	円形	0.15	-	0.05未満	黒褐色	土師器 甕(100)	SB4
	SD122	C24-2		(1.90)	(1.22)	0.50	黒褐色	須恵器片 土師器 甕	
	SD123a	C24-1		(18.00)	0.20~0.30	0.10~0.30	暗褐色	須恵器 坏(101)・甕 土師器片	畠跡か
	SD123b	C24-1		(1.90)	(0.37)	0.07	暗褐色	土師器片	畠跡か
	SD123c	C24-1		(1.29)	0.28	0.05	暗褐色	須恵器片 土師器片	畠跡か
	SK124	C24-1	円形	0.50	-	0.30~0.40	暗褐色	-	SB4 SK124→SD123b
	SP125	C24-1	円形	0.25	-	0.12	暗褐色	土師器片	
	SP126	C24-1	不整 円形	(0.60)	(0.33)	0.10~0.20	暗褐色	須恵器片	SB4
	SP127	C1	円形	0.43	-	0.30	黒褐色	-	SB4
	SP128	C1	不整 円形	0.40	-	0.23	黒褐色	須恵器 坏(102)	SB4
SP129	C1	不整 円形	(0.50)	-	掘削せず	黒褐色	土師器片		
SP130	C1	隅丸 方形	0.40	0.60	0.10	黒褐色	須恵器 坏蓋 土師器 甕(103)	103:9世紀前半	
第15図 E	SD131	C1		(0.10)	0.60	0.18	黒褐色	土師器片	
	SP132	C20	円形	0.36	-	0.20	黒褐色	土師器 甕	
	SD133	C20		(1.05)	0.26	0.05	暗灰色	須恵器 坏蓋 土師器片	
	SD134	C20		(1.00)	0.74	0.10	黒褐色	土師器片 黒色土器	
	SD135	C20		(1.00)	0.40	0.15	暗灰色	須恵器 坏蓋(104) 黒色土器片	
	SP136	C21	隅丸 方形	0.70	(0.31)	0.30~0.45	黒褐色	須恵器 坏・坏蓋(105) 土師器 壺	
	SD137	C20		(1.70)	(0.30)	0.05	黒褐色 ブロックまじり	土師器 甕	
	SP138	C20	不整 円形	(0.40)	(0.32)	0.24	黒褐色	須恵器 坏A	
	SP139	C21	隅丸 方形	0.60	-	0.25	黒褐色	土師器 甕	
	SD140	C22-2		(2.20)	0.45	0.05~0.10	暗灰色	土師器片	
	SK141	C1	不整 円形	(1.00)	0.55~0.80	0.25	黒褐色	須恵器片 土師器片 土錘(106・107)	
	SP142	C20	円形	0.20~0.25	-	0.20	黒褐色	土師器片	
	SD143	C1		(1.40)	0.30	0.13	暗灰色	土師器片	
	SP144	C20	楕円形	0.60	(0.32)	0.15	黒褐色	須恵器 坏蓋(108) 土師器片	
	SX145	C22-1	楕円形	(1.00)	(0.50)	0.70	暗灰色	須恵器 甕	
SP146	C22-1	円形	0.30	-	0.05未満	暗灰色	須恵器 小型甕(109)		
第15図 F	SD147	B8・B16		(4.20)	0.40~2.00	0.10~0.15	黒褐~暗灰色	土師器 壺(110)	
	SD148	B16		(1.20)	0.50	0.05	暗灰色	土師器片	
	SD149	B16		(2.25)	0.50	0.30	暗灰色	須恵器 坏 土師器 壺(111・112)	
	SD150a SD150b	B16		(1.20)	0.92~1.19 1.61	0.40	黒褐色	須恵器 坏蓋	
第15図 G	SD151	B14		(1.50)	1.10	0.05	黒褐色粘 しまり強	須恵器 甕	
	SD152	B14		(3.50)	(0.40~ 0.60)	(0.10~ 0.20)	黒褐色	土師器片	
	SK153	B10	楕円形	(1.10)	(0.30)	(掘削せず)	黒褐色	土師器 甕	
	SK154	B10	楕円形	(0.50)	0.25	0.20	暗灰色	砥石か	
	SK155	B13	円形	0.50	-	(0.50)	黒褐色	土師器 甕(113)	
写真 図版7		B地区					須恵器 坏・壺、土師器片 青磁 碗(114) 近現代磁器 皿・碗・小鉢・猪口・播鉢 不明陶器 蓋	114:14世紀初頭か	
写真 図版7		C地区					須恵器 坏・坏B・壺(117)・坏蓋・壺(118)・甕 土師器 壺(118)・甕(115)・甕把手(116) 越中瀬戸 碗・高台碗(灰釉) 肥前磁器 碗、近代磁器 皿、不明陶器	117:(黒色塗膜付着)	



第13図 試掘調査・工事立会調査区全体図



第14図 試掘調査・工事立会遺構図(1)



第15図 試掘調査・工事立会遺構図(2)

第5章 総括

第1節 発掘調査

今回の発掘調査は主に古代の遺構・遺物を検出した。調査地点の北隣では平成20年度の調査(富山市教委2009)で中世の居館跡と想定される方形にめぐる区画溝が検出されていたが、今回の調査では中世の遺構は検出されず、遺物は中世土師器が数点出土するだけに留まった。

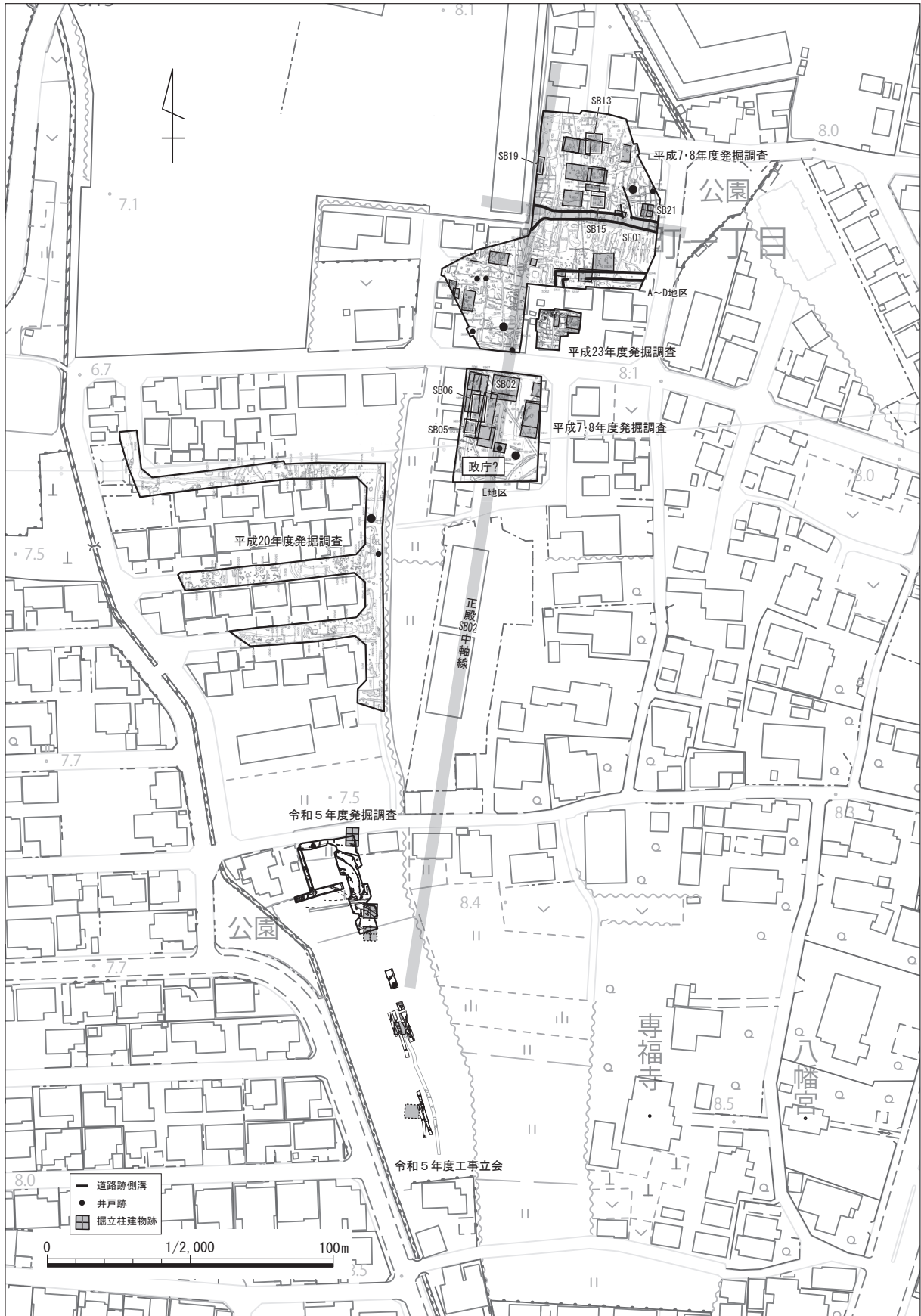
今回の調査地点は、新川郡衙の郡庁と推定される建物群を検出した平成7・8年度調査E地区の南方にあり、同建物群の中心建物である正殿(SB02)の正面から約180mの距離に位置する(第16図、富山市教委2006、藤田2004)。この南北180mの間の古代遺構の広がりには不明であるが、平成20年度調査で検出された井戸より西への広がりには希薄である。今回の調査地点は、郡庁域が立地する微高地の南西側縁辺部にあたる。

調査区南側の遺構の重複は、溝SD02→溝SD01→掘立柱建物SB1・2の前後関係があり、それにより古代の遺構は3時期に分類される。SD02は遺物が少なく時期の確定はできないが、8世紀後半の須恵器が出土している。本調査で最も古い時期の遺構と考えられ、溝の方位も9世紀のものとは大きく異なっている。平成7・8年度調査の建物群は8世紀末には出現しているが、SD02との直接的な関連性は見出せない。

SD02に続くSD01は比較的規模が大きい直線的な溝である。8世紀後半から9世紀の遺物が混在する。一部に掘り直しの痕跡がみられ、長期間存続したと考えられるが、遺物の主体となる9世紀後半には埋没したと判断される。北に接する柵SA1・2はSD01と方位が直交し、同時期と考えられる。また平成7・8年度調査の建物群の正殿SB02と同一方位ないし直交する小溝SD33・35・37・38・46・58は、同建物群の中心時期となる9世紀中頃の遺構になる可能性がある。9世紀中頃から後半にかけて、SD01の存在と、その北側に柵や小溝群が広がる状況が想定される。

SD01の埋没後には、本調査区域にも掘立柱建物が出現する。SB1・2は2×2間の総柱建物が並列する形が想定され、柱筋の一致から同時存在したと考えられる。またSB3は南側に庇が付く建物で、全容が不明ながら、SB1・2と柱筋が一致しており、SB1・2との同時存在が想定される。SB1～3は、平成7・8年度調査の建物群のなかでも後出するとされる真北に近い建物SB05・06・13・15・19の方位に類似しており、出土遺物とあわせ、9世紀後半の建物と判断される。SB1・2とSB3の間には、小溝SD17・21・22・41が存在する。平成7・8年度及び平成23年度調査(富山市教委2012)では建物群と重複する小溝群があり、畠跡とされているが、今回検出した溝も同様に畠跡の可能性はある。井戸SE44は建物に伴うと考えれば、この時期にあたる。

本調査区は、平成7・8年度調査建物群の正殿SB02の中軸線の南側延長線上にほど近く、9世紀後半になって、その西側に総柱建物が並列する状況が明らかとなった。同様の総柱建物は平成7・8年度調査のC地区にSB21があるが、本調査のSB1～3は柱穴規模がSB21の半分程度である。また200点以上の墨書土器を出土した平成7・8年度調査区に比べて、本調査区は出土遺物も限られるなど、郡衙中枢地との直接的な結びつきは認められなかった。しかし平成7・8年度調査及び平成23年度調査では、概して総柱建物は少なく、本調査区の総柱建物の存在は特徴的である。郡衙推定地に隣接する集落の一端が垣間見られたものの、その全容や郡衙中枢域との関連性は今後の周辺調査に委ねられる。(常深)



第16図 米田大覚遺跡の古代遺構

第2節 工事立会

工事立会では、掘立柱建物 SB4、素掘りの井戸 SE110、小溝群などを検出した。

SB4（第14図D）は柱間距離が約2m、軸方向が真北に近い2間×2間の側柱建物である。SB4を構成するSP118から、体部に墨書「八」がある須恵器埴（99）が出土し、SK124では畠跡と考えられる小溝群SD123より古いことを確認した。須恵器埴（99）は9世紀初頭に比定でき、建物は9世紀初頭まで存続し、その後、周辺は耕作地として利用されたと考えられる。これら遺構の先後関係は、平成7・8年度、平成23年度調査でも確認され、掘立柱建物→小溝群の変遷が報告されており（富山市教委2012）、今回の調査とも矛盾はない。

小溝群SD123は、南北方向を基調とする。同様な溝は他にも、SD96～99（第14図A）、SD116・117、SD120（第14図D）がある。これらの溝は、小規模かつ一定間隔で平行することから畠跡と考えた。これらの遺構からは、10世紀頃の土師器甕（84・85）が出土し、畠跡の形成時期を示すと考えられる。

素掘り井戸SE110では、墨書された土師器埴（92）、ひょうたんの底部が出土したことが特筆される。土師器甕（99）から10世紀頃の遺構と考えられ、小溝群と同時期となる。

このほか、SP136、SP139は平面形が隅丸方形を呈する柱穴と考えられ、柱間距離が2mの掘立柱建物の可能性がある。東隣のC20区で対応する土坑が確認されないため、未調査地に展開すると推測される。

発掘調査区に近いC27区の遺構検出時では、内面に黒色塗膜が付着する土師器埴（118）が出土した。付着物は成分分析を行っていないが、漆の可能性はある。黒色塗膜は部分的に剥離し、塗膜の厚みは一定で、縮みシワは見られないことから、漆塗り製品の可能性も考えられるが、漆をかき混ぜるための漆パレットとしての利用を想定したい。

米田大覚遺跡の古代の遺構分布は、既往の調査から遺跡範囲の中央部が主体であり（富山市教委2006）、遺跡南西部では密度が低調となる（富山市教委2009）。今回の調査によって、古代の遺構分布が希薄と考えられていた本遺跡南寄りでも古代の遺構が展開することが確認できた。（泉田）

引用・参考文献

- 富山市教育委員会 1974 『富山市豊田遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1984 『富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1987 『富山市飯野新屋遺跡 主要地方道富山環状線工事に伴う古墳時代前期集落跡の調査概要』
- 富山市教育委員会 1990 「Ⅲ 試掘調査 C 中富居遺跡」『平成元年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1996 『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1998 『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1999 『富山市中富居遺跡 発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2000 『富山市小西北遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006 『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007 「Ⅱ 宮町遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概報Ⅱ』
- 富山市教育委員会 2009 『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書—米田すずかけ台団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告—』
- 富山市教育委員会 2012 『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ—西金屋・西金屋窯跡 米田大覚遺跡—』
- 富山市教育委員会 2013 『富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2019 『富山市米田南田遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2023 『富山市中富居遺跡発掘調査報告書』
- 藤田富士夫・駒見和夫 1981 「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会
- 藤田富士夫 2004 「古代越中国新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報 第2号』敬和学園大学
- 古川知明 1995 「最新の発掘成果から」『富山市考古資料館報』No.27 富山市考古資料館
- 堀沢祐一 2003 「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会



発掘調査区全景（空撮、南東から）



発掘調査区全景（空撮、北から）

写真図版2 遺構(2) 発掘調査



発掘調査区北部（東から）



発掘調査区南部（北西から）



SB1・2 完掘 (北から)



SB3 完掘 (北から)



SD01 完掘 (北西から)



SD02 完掘 (南東から)



SD14 完掘 (北西から)



SD17・21・22・41 完掘 (北西から)



SK15 完掘 (南から)



SE44 完掘 (北から)



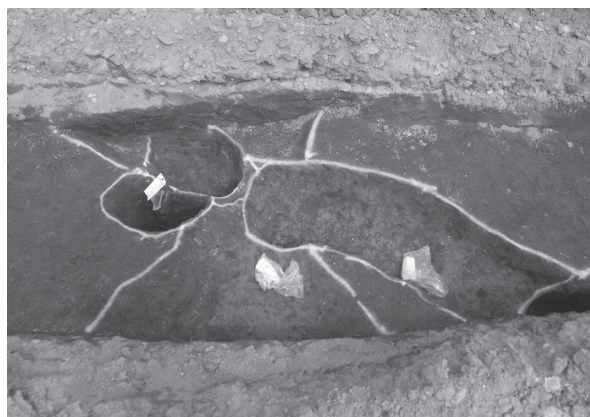
SK05・SP100・SP101(SB2) 完掘 (北西から)



SK124(SB4)・SD123a～c・SP126 完掘 (北西から)



SP118(SB4)・SD120 完掘 (南から)



SP118(SB4)・SD119・SD120 近景 (西から)



SE110 完掘 (南東から)



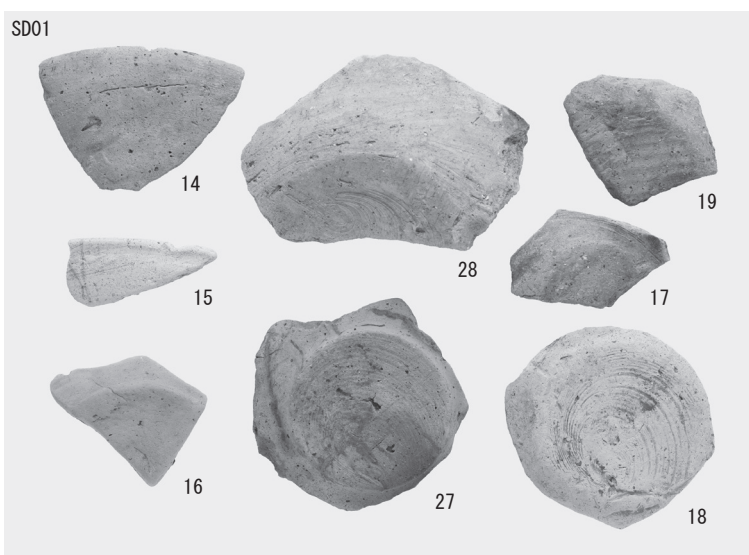
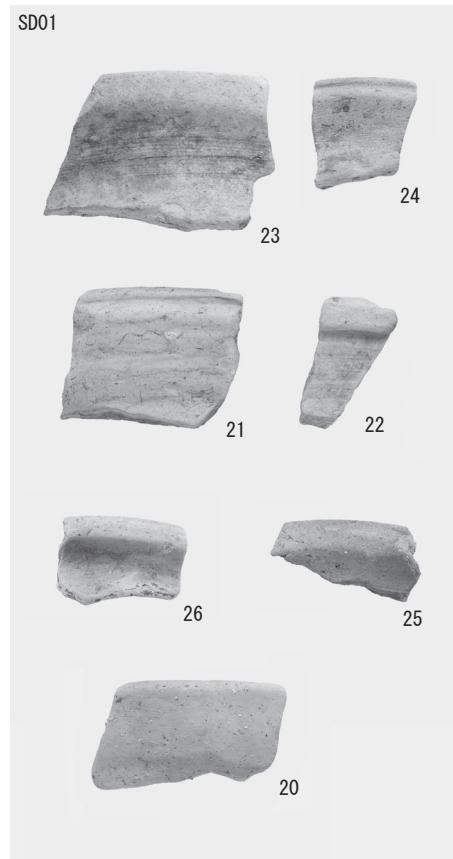
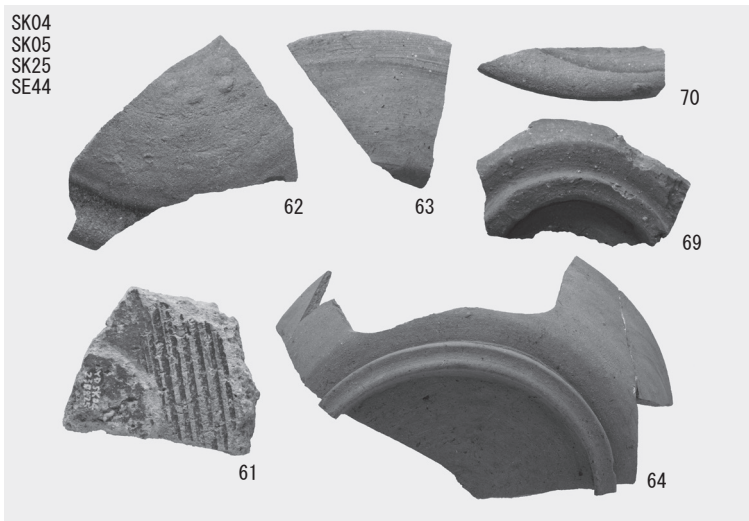
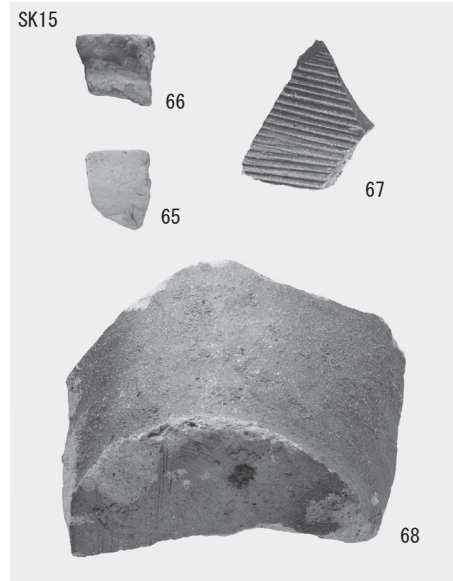
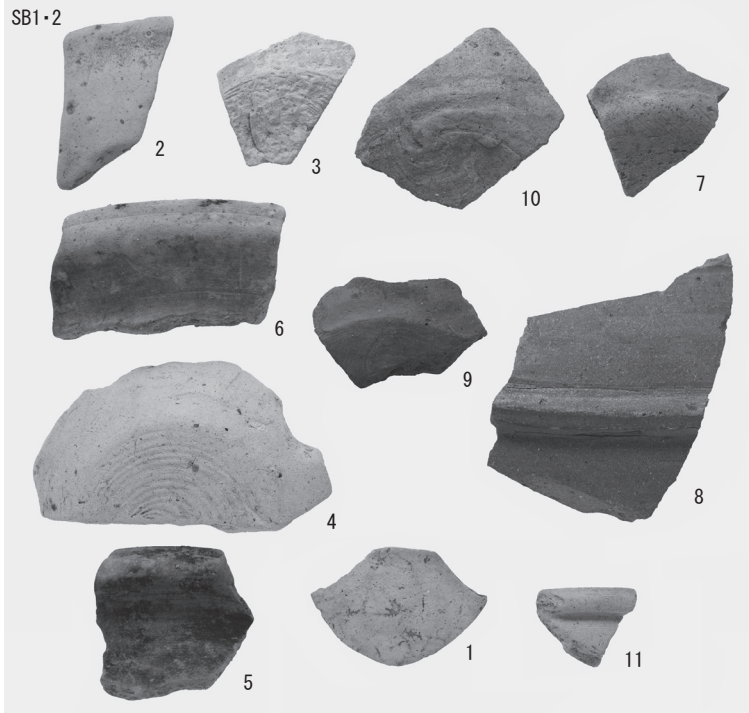
SE110 近景 (南東から)



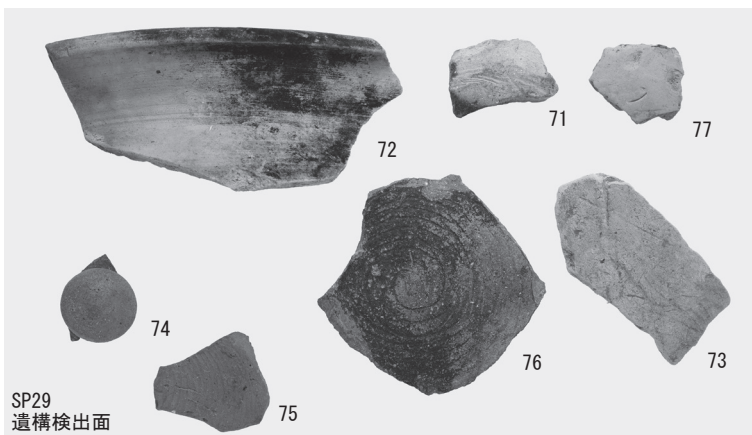
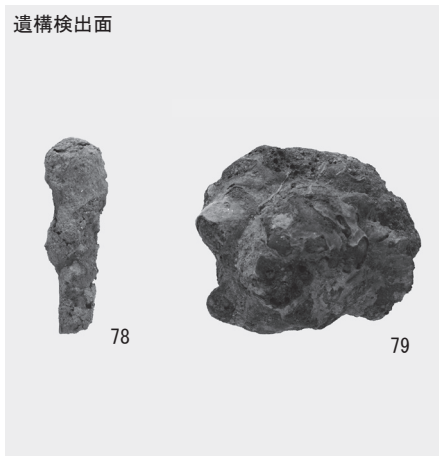
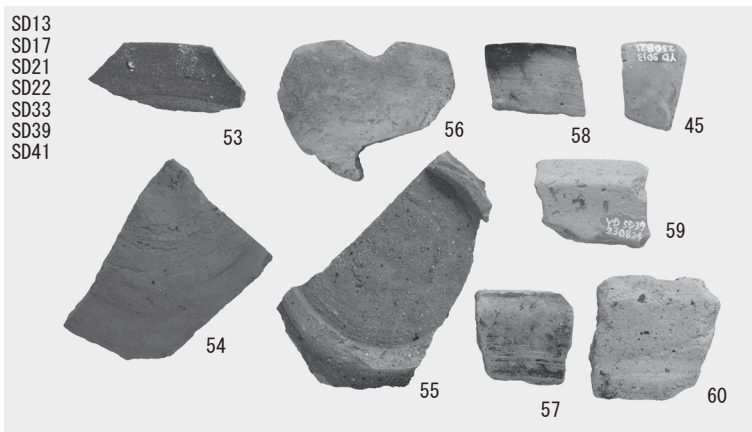
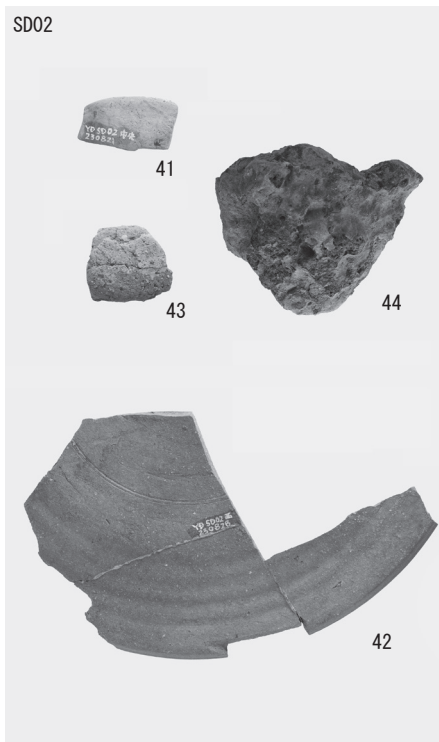
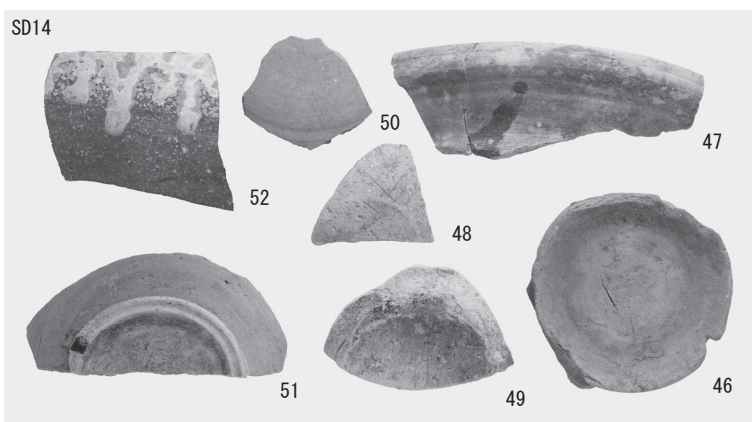
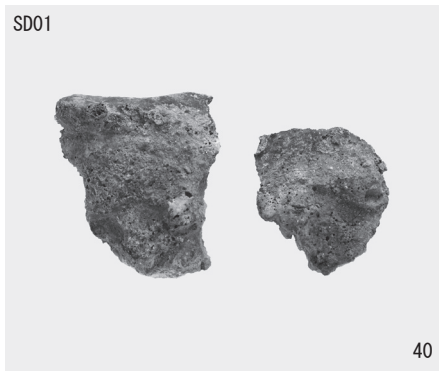
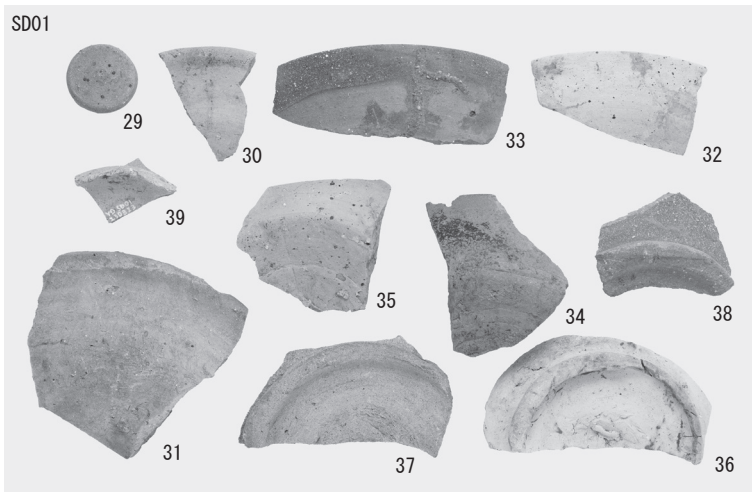
SD96・97・98・99 完掘 (北西から)



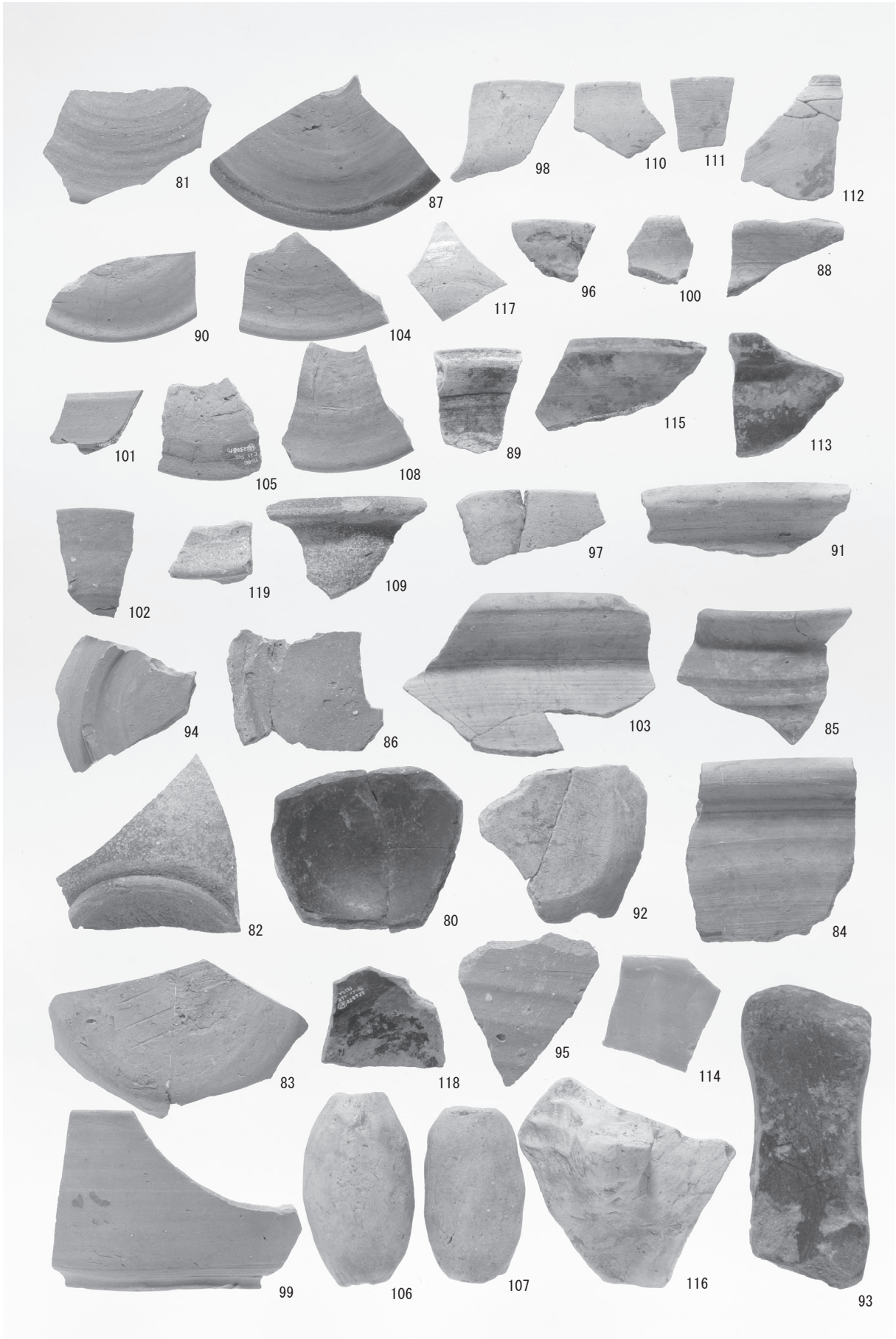
SP136・139 完掘 (北西から)



遺構出土遺物(1)



遺構出土遺物 (2)・遺構検出面出土遺物



報告書抄録

ふりがな	とやましよねだいかくいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115							
編著者名	泉田侑希（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）、常深 尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所）							
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 富山支所							
所在地	〒939-0351 富山県射水市戸破1679-3-A							
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター							
所在地	〒939-2798 富山県富山市婦中町速星754 TEL 076-465-2146							
発行年月日	2024年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よねだいかくいせき 米田大覚遺跡	とやまけん 富山県富山市 よねだまにちようめ 米田町二丁目	16201	2010034	36° 44' 11"	137° 14' 24"	20230817 ~	(発掘調査)	宅地造成工事
						20230828	249.60㎡	
						20230728 ~ 20230925	(工事立会) 359.31㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
米田大覚遺跡	集落	古代	掘立柱建物・柵列・溝・小溝群(畠)・柱穴・土坑・井戸	土師器・須恵器・墨書土器(「八」・「口」)・黒色土器・製塩土器・灰釉陶器・土錘・輪羽口・砥石・角釘・鉄滓・ひょうたん	掘立柱建物4棟を検出、うち1棟は雨落ち溝を伴う柵・井戸を検出			
		中世		中世土師器・珠洲・青磁				
		近世		越中瀬戸・肥前磁器				
要約	<p>米田大覚遺跡は、富山市北部に位置し、神通川と常願寺川に挟まれた氾濫原に立地する。既往の調査から、古代越中国新川郡衙に比定される。今回の調査区は、新川郡衙比定地の南方約180mに位置する。</p> <p>発掘調査では、掘立柱建物3棟、柵2条、溝23条、土坑11基、井戸1基、ピット34基を検出した。これらは古代(8世紀末～9世紀後半)中心で、3時期に細分できる。掘立柱建物が出現するのは9世紀後半に入ってからであり、それより前は溝が主体となる。建物は北方向を軸とし、郡庁域と推定される平成7・8年度調査区で検出された掘立柱建物と方位が類似する。また、総柱建物の存在は特筆される。</p> <p>工事立会では、掘立柱建物1棟、溝61条、土坑46基、井戸1基、ピット27基、不明遺構7基を検出した。掘立柱建物は9世紀初頭に比定され、10世紀に入ると小溝群(畠)が形成された。時期は異なるものの、この変遷は、平成7・8年度、平成23年度調査でも確認されており、今回の対象地でも同様な土地利用が行われたと推定した。このほか、掘立柱建物や井戸からは墨書土器「八」・「口」が出土し、漆の可能性のある黒色塗膜が付着した土師器が出土した。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告 115

富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2024（令和6）年3月29日発行

発行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒939-2798
富山県富山市婦中町速星754番地
(婦中行政サービスセンター本館3階)
TEL 076-465-2146
Fax 076-465-5032
E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

編集 有限会社毛野考古学研究所 富山支所
〒939-0351
富山県射水市戸破1679-3-A
TEL 0766-57-1618

印刷 株式会社中村